
一ターン目のアートマ

紅藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一ターン目のアトマ

【Nコード】

N2361Y

【作者名】

紅藍

【あらすじ】

近未来。

記憶と人格を保ったまま転生を繰り返す人々・アトマの出現によって、あらゆる制度が変化を迫られつつある社会。生と死の概念が崩れ去ってしまった世界。

刑務所都市・アリアンロードを舞台に、その事件は起こる。

一人の少女と一匹の猫を、物語の中心として。

電撃小説大賞二次選考落選作です。辛口批評など歓迎いたします。

プロローグ

男は逃げていた。

真夜中のストリート・モール。人の気配は皆無で、月すらも雲に隠れて顔をみせない。街灯もごくごくまばらにしかなかった。

通りの中央を疾走する男の視界の左右を流れていくのは、長い間開けられた形跡のないシャッターや、ひび割れたままのショーウィンドウばかりだ。通り一帯が、本来の役割である商業機能を真つ当に果たせなくなって久しい。

男は視線を上げた。

やや遠くで、傾いた看板が壁面へとしがみついている。錆びた金属板の上では、歯抜けになったネオンサインが明滅していた。

自らの存在意義がとうに失われたのにも気づかず、それでも健気に役目を果たそうとしているのだ。まるで、戦争終結を知らずに壕の中で潜伏し続ける兵士のように。

—— 一度、壊してしまえばいい。

お馴染みの思考が男の胸にうかんだ。

寂れたストリートがいつまでも立ち直れないのは、一度でも完璧に死んだことがないからだ。死にかけてはいるが、しかし死にかけのまま存在している商店の群れ。破滅にまでは至っていない。いつまでもこの世から離れられず、ゾンビのような醜態を晒し続けているのだ。

だから再生しない。

破壊がなければ、再生はありえない。

それが男の哲学だった。

事実、男は今までずっとその哲学に従って生きてきた。

汚れたもの、うまくいかなかったもの、欠陥があるもの——それら全てを壊してきた。

趣味で描いた出来の悪い水彩画や、醜いわりに化粧ばかり濃い姉、購入したもののいまいち部屋とマッチしない家具や、酒と注射器に溺れて喧嘩ばかりの両親——そして時に、自分自身の人生さえも。

壊してしまえばいい。

一度壊しさえすれば、新しい次が訪れる。

ばらばらにした過去は無かったことになり、全てはリセットされる。

そんな思考をうかべ、足下への注意が疎かになった瞬間——男の左足へと何かが絡みついた。

反応が遅れ、男は無様にも地を転がる。混乱しつつもなんとか受け身を取り、左足を確認した。

視界の中央にあるのは、銀色の輝き。

後方に広がる暗闇から伸びてきた一本の細いロープが、男の左足首へと噛みついていていた。

「——捕まえた」

ゆっくり迫る足音と共に、未だ闇を纏ったままの追跡者が声をあげた。

落ち着いた女の声。冷たく静かな響きは、冬の夜に似ていた。呼吸の乱れもない穏やかさだった。

対する自分の口からせえぜえと白い息が立ち上っていることに、男は気づいた。

「だれだあ、お前？」

なかなか外れないロープを握りしめながら男は叫んだ。溢れ出てくる恐怖を、少しでもおしこめようとして。

ありえない。自分が追いつかれるなんてありえない。自分は特別な人間、神に選ばれた人間なのだ。普通の相手なら、たとえバイクが追っ手でも撒けるというのに。

「犯罪者に名乗る名前はない。知られると面倒だし」

相変わらず淡々とした調子で、追跡者が街灯のわずかな光へと頭部を晒した。

現れたのは――一人の女、いや、十六歳前後の少女だった。

薄暗がりの中でもわかるほど鮮やかな赤毛の下で、エメラルドの双眸が凜とした輝きを放っている。それは冷たい輝きではあるが、一方で強烈な意志も感じさせた。形のよい唇が、発音のために最適化された形でもって、続く言葉を紡いでいく。

「ああ、そっちも名乗らなくていいよ。もう知ってるから。現ターンにおける戸籍名、ロバート・スミス。ロバートとしての罪状だけなら……ここ二ヶ月で起きた五件の連続強姦殺人、その容疑者として目下指名手配中。何か訂正は？」

少女がさらに近づき、身体全体が姿を現す。

異様な出で立ちだった。

上はオフショルダーのカットソー、下はシンプルなホットパンツ。ここまでいい。

奇異なのは、上半身へとめちやくちやに巻き付けられた銀色のロープだ。まるで少女自身が捕らわれた獲物であるかのように、がんじがらめとなっている。そしてそのロープこそが、少女の左手を経由し、今、男の左足首へと喰らいいついているものだった。

「訂正なんざねえよ。する必要がねえからなあ！」

男は咆哮をあげた。ロープをつかんで思い切り振り回す。

つながっている少女の身体は軽々と吹き飛び、振り子のように弧を描いて、商店のショーウィンドウへと叩きつけられた。ガラスが粉碎され、少女はそのまま店の中へと放り込まれる。

「思い知らせてやるぞ！ なめやがって、女一人だと？ 雌豚一匹で、俺をなんとかできると思ってたやがるのか？」

男はロープを引っ張りつつ拳銃を取り出した。トリガーが躊躇なく引かれ、ストリートへと銃声がこだまする。割れたウィンドウの奥に広がる闇が、次々と銃弾を吸いこんでいった。

標的へと確かに着弾している衝撃が、ぴんと張ったロープを通じて男の腕へと伝わってくる。

そのてごたえ——肉厚のステーキへと犬歯を突き立てるのに似た感覚が、男の精神を高揚させ、トリガーを何度も何度も引き絞らせた。

そうだ、今の自分には力がある。

病弱虚弱だったかつての自分は遙か昔に死んだ。死んで、生まれ

変わったのだ。もう、ひよろい身体を遊び半分でサンドバッグにされはしないし、屈辱的な格好をさせられてクスクスと笑われもしない。

なめた女ども、いや雌どもに、身と尻の振り方を叩きこんでやるのだ。

「カハッ……ハハハ、アッ、ギャハ、アッハハ」

銃弾を撃ちつくし、辺りに硝煙が満ちる中、男は両腕をだらんと下げた。さっきまでの憤怒とは一転、恍惚とした表情で喘ぐ。自然と鼻歌を口ずさんでしまっていた。

お料理お料理楽しいな。

銃を使ってドン・ドン・ドン。はい、一丁あがり。

売女の流血ソース、弾丸ソーテー添え。

冷めちまわないうちにいただくでしょう。

薄明かりの下で見た少女の容姿を思い出し、男は齒をむき出しにして笑った。

かなりの上玉だった。年相応といった細身の身体は肉感が少し物足りないかもしれないが、たまにはそちらの趣向もいいだろう。できれば活き造りがベストであるのは確かなのだが、今回はかりは仕方ない。

流れる涎を拭いながら、男が一步踏み出した時だった。

未だつながったままのロープが、向こう側から強く引っ張られたのは。

「——どうやらビンゴだったみたいだ」

不意をつかれてバランスを崩す男の耳に、たった今蜂の巣にしてやっただけの少女の声が聞こえた。

銃の発射音も。

間断なく放たれた三発の銃弾。苦しい姿勢ながらも、男は懷から出したナイフで全てを叩き落とした。ひしゃげた弾丸が足下に転がり、鈍色に光る。

「その怪力と反応、やっぱり>アトマくだね」

のそり、と闇から出てきたそれを目の当たりにし、男の両眼が限界まで見開かれた。動悸が速まり、足が勝手に一歩下がる。

とびきり悪趣味な夢でもみているのではないか、そうであつてくれと願った。だがそれは現実だった。幻想だったのは——男が今まで振りかざしてきた『誇り』の方だった。

「お、俺は……選ばれた人間のはずだ」

アトマ——記憶と人格を維持したまま、何度でも転生できる人間。世間では幽霊やUFOと同じカテゴリーに属し、都市伝説やオカルトの中にしか住めないとされている存在。

男は、そういった伝説の存在だった。本や写真から飛び出したファンタジーだった。

「選ばれた存在、か。あなたみたいな人間は、皆が似たセリフを吐く」

もちろん、自分と似た者がこの世のどこかにいるかもしれない、と考えたことがなかったわけではない。それでも、男は少女の姿を見て絶句したのだ。おとぎ話の住人は、その世界以上のファンタジーを夢想したりなどしないから。

「お前……なんなんだ？ 警察じゃ、ない」

呆然と呟く男の前にあるのは、未知の存在、未知の光景。B級ホラーのような映像。

ガラス片と銃創にまみれた少女が、こちらへゆっくりと歩いてくる。

血が流れ出している傷口は、蠢く口のようにひくひくと痙攣している。

黒い硝煙に似た気体を噴出させつつ、傷口は面積を縮めていき、やがて塞がった。

肉体に押し出されたガラス片が落ち、澄んだ音をたてて碎けた。同じように傷口から吐き出された灼熱の弾丸が、血だまりでジュツと音を鳴らした。

自己再生能力——それも、ひどく強力な。

男にとつての常識を超えたファンタジーが、今、華奢な右腕を上げて拳銃を突きつけてきていた。

「そう、警察じゃない。あなたの罪は、もう警察じゃ裁けない。今までもそうだったろう？ ロバート……いや、ケネス＝レーン」

意図的に強調された人名に、男の心臓が大きく脈打った。噴き出した脂汗が、夜の空気をより一層冷たく感じさせる。

「どっからその名前を……？」

ケネス「レーン。」

男がこの世に初めて生まれてきた時、くそつたれの両親からつけられた名前。とうの昔、前世の前世のそれまた前世に捨てたはずの、呪われた記号だった。

男の反応を見た少女は微笑んだ。硝煙のよく似合う笑み。

「実は確定じゃなかったんだけど、当たりだったようだ。犯行手順や被害者の特徴なんかから予測して、カマかけただけ。単純な奴は特定しやすいな。『馬鹿は死んでも直らない』っていうのは、文字通り、本当だったみたいだね」

「！ このアマツ——」

少女へ向かって男は突進した。向けられている銃口など気にもしない。

「怒った？ 怒ったのか？ ケネス？」

嘲りと弾丸が男へと飛来してきた。弾丸ははじき飛ばせたが、少女の言葉は男の心へと深くくいこんだ。

「その名で俺を呼ぶな！」

怒号を放ち、右手のナイフを突き出した。刃の先端が少女の喉元に届く直前、その動きはピタリととまる。

いつの間にか周囲に展開されていたロープが、男の右腕を拘束していた。

「何度でも呼んでやるさ、ケネス」

少女の銃撃が連続で響く。ロープの呪縛を力ずくで振りほどき、男は距離をとって銃弾をかわした。

かわしたのだと思っていた。

ぱりんと音がなり、それが思い違いだったと気づいた。

まばらにしかなかった街灯——貴重な光源が全て割られていた。月明かりすらない暗闇が辺りに満ちる。

「糞！ 小賢しい」

吐き捨てながら男は瞳へと神経を集中した。

すかさず虹彩を操作——網膜に入れる光量を調整。

視界を取り戻すまでに一秒とかからなかったはずだが、その間に少女の姿は忽然と消えていた。

「どこだ？」

ぎらついた眼で男は周囲を見渡す。

右か、左か。

それとも後ろか？

「——上だよ」

少女の足裏が男の頭頂をとらえた。続けざまに両肩が撃ち抜かれる。両腕は一切の命令を受け付けなくなり、代わりに痛みというア

ライトを鳴らし始めた。

「っ！ まだだ、まだ……」

「いや。もうおしまいさ」

少女が左手を動かすと、男の両足にロープが絡みついた。男はなす術なく仰向けに倒れる。視界が上方へと強制的に向けられ——本人の意志とは無関係に、喉がひきつった叫びを発した。

「ひっ——！」

男へ向け、一直線に落ちてくるものがあつた。

ロープに絡め取られた、ネオンつきの看板。ストリートの壁にしがみついていたのを力ずくではがし取られた、やや分厚い鋼鉄製のギロチン。

酒場か何かのものだったのか、看板にはこう書いてあつた。『アリス・イン・チェインズ』と。

絶叫が、あがつた。

垂直に落ちた看板が、男の両膝を切断しつつ地面へと突き刺さっていた。

断面から勢いよく血液が噴出し、血だまりを広げていく。太ももの裏、尻、そして背中へと、順に血で濡れていく感覚が男の精神を追い詰めた。

泣き叫ぶ声は赤子のようなだった。痛覚は咄嗟に遮断していたが、両足を失ったという喪失感だけはどうしようもない。

「お前……よくもこんな……よくも、よくも！」

「なに、後でつなげてもらえるさ。それに……あなたのやってきたことに比べれば、たいしたことないだろう？」

傷口がロープで縛りあげられ、出血の勢いが無理矢理弱められる。男が失血死しないための処置なのだろうが、間違いなく、少女の慈悲から生まれた行動ではなかった。

むしろ逆だった。

両手足の自由を失った男を冷たく見下ろし、少女は告げる。

「手配者リスト登録名・ケネス・レーン。一ターン目、当時の両親と姉を一晚で射殺。逮捕後は留置所内で首を吊って自殺。生まれ変わった二ターン目、無差別に女性九人を強姦して絞殺。十人目にのしかかっていたところを現行犯で逮捕。そしてまた留置所内で自殺。三ターン目——」

少女が罪状を述べ立てていくにつれ、男の心から怒りの感情が消えていった。

「な、なんのことだ……？ 俺には、さ、さっぱり」

卑屈に笑って男は答えた。

吐き気がしていた。

これでは、忌々しいあの頃と同じだったからだ。酔った勢いで平手を振り上げる母や姉の前で、あるいは大勢の同級生に囲まれる中で——情けなく震え、逃げることもできず、ただ嵐が過ぎ去るのを待つしかできなかったあの頃と。

「捕まっては自ら命を絶ち、生まれ変わることで……あなたは、法の拘束から逃れ続けてきた。けどそれも今日でおしまい。もうあなたは死ねない。わたしが殺さないからね。もう、逃げられはしないよ」

「馬鹿な。どうしてわかる？ 俺の過去……。ありえない、こんなことは……。ありえない、ありえない」

——自分が手に入れたのは、人生をリセットできる権利じゃなかったのか？

男は恐れた。

過去が蘇ってくることを恐れた。

打ち壊し、ぶち殺し、土の下へ埋め、後ろ足で砂をかけ、唾を吐きかけてやった過去。

いつでもポイと捨て、容易に葬り去れると思っていた数々の罪が、墓の下からはい出し、自分を引きずりこもっている——！

汗まみれになった男の額へと、小さな謎の機械があてられた。ピツという音が鳴り、少女が頷く。

「精神紋一致、簡易認証だけど十分な物的証拠だ。アリアンロッドから委託された捜査員権限により、あなたを拘束する」

少女の機械音声のような宣告と共に、男の口へと拘束具がはめられる。

男は、全てが終わってしまったことを悟った。

いや、全てが終わりになきものになってしまったことを、悟った。

両足からの出血によって、霞んでいく意識。

このままどうにかして失血死できないだろうか、と一瞬だけうかんだ希望も、少女の瞳にうかぶ眼光の前には、あまりにも儚い。

意識を失う直前、少女の呟きが男の耳へ届いた。

「そう簡単に……やり直しなんかできやしないさ」

その声の、物憂げで悲しげな響きに送られて。

男は闇に落ちていった。

地獄へと至る前に許された最後の慈悲、ひとときの安息へと。

「うるさいなあ……。バスの中なんだから静かにしてなよ」

膝上でわめく子猫から目線を逸らし、ライムはこめかみをおさえた。

猫のわめきといっても、ニャアニャアとかキャンキャンといった愛らしいものでは全くない。

具体的にはこんな調子だ。

「まだ話は終わっていない。いいか？ 何度も言うが、相手の両足を切断するなんてやり過ぎの論外もいいところだ。ただ生きたまま捕えるだけなのだから、他にいくらでも方法はあった」

尻尾でライムの膝をばしと叩きながら子猫が説教を続けた。

縦長の瞳孔と黄色の虹彩を持った眼を大きくひるげ、ふわふわの体毛よりもさらに長いヒゲを上下に震わせている。

そんな可愛い、小さく幼い身体から発せられるのが人間の言葉、しかも渋い低音というのは、まったく奇妙という他なかった。

窓際に頬杖をつき、ライムは外を眺める。流れていく昼の景色は森林の静けさばかりで、話題を昨夜のことから他の何かへ変えてくれるようなハプニングも、延々と続く小言から気を紛らわせてくれるような面白さもなかった。

「うまくいったんだからいいじゃない」

「無用な危険をあえてとる必要はない。もし、血が止まらずにケネスを殺してしまっていたら？ どうするつもりだったのだ」

「さあ……。カグマ”先生”ならどうしてたのかな？ 昨日の追いかけてこには、一匹だけ取り残されてたみたいだけど」

ライムは先生の部分を強調した。事実、この子猫——カグマからは多くのことを教わっている身なのだが、今はそういった敬意をこめているわけではない。

「猫の肉体は短距離向けだ、昨夜のように長距離を走らされるのは向いていない。それに私の役目は、あくまで指導の一点に尽きる」

挑発にのせられた様子もなくカグマは答えた。面白くないなとライムは内心で呟き、

「結局生きたまま捕まえられたんだから、いいじゃない」

そう言つて、深くため息をついた。曇った窓ガラスへ人差し指をあててみると、深まる冬の冷たさが伝わってくる。

「……痛いんだけど」

マルゲリータ、と今食べたいものの名前を窓に描いていると、親指を軽く噛まれた。

「話をきけ話を。終わりよければ全てよしと甘えていたのでは、向上など望めぬぞ。うまくいった場合でも、反省点はいくらでもあるのだから」

「わかったよ、わかった。次からはやりません。反省しました。これでオーケー？」

窓の方を見たまま棒読みで両手を挙げてみせる。

うんざりしていた。バスに乗りこんでからさっきまでずっと熟睡していたくせに、目が覚めて暇をもてあました途端にこれだ。黙っていたらそれはもう可愛らしい子猫なのに、口を開けば中身は説教好きの年寄りそのまま。これでは誰でも、相手にしてられなくなるのが普通じゃないだろうか。

しばらくの沈黙——本当に嫌な沈黙——を経た後、カグマが語勢を弱めて言った。

「私情があつたのか？」

ずばり指摘され、ライムは思わず視線を膝元へと向けてしまう。後悔した時には既に遅し。前足を揃えて座りながら見上げてくる猫の瞳に、がっちり囚われてしまっていた。いまさら嘘もつけず、正直に話すことにする。

「被害者の写真、見たんだ」

思い出しただけで手に力がこもった。

ケネスⅡレーンの餌食になった被害者女性の写真、捜査資料に挟まっていた数枚。食い散らかしの残飯——そんな表現がぴったりの死体達。

「どこまでもケダモノになれるものなんだね。人ってのはさ」

そんな呟きに、カグマは諭すような声で返す。

「ああいった者の存在は否定できないが、人間全てがそうではない。

少なくとも私達は、ああいった者達とは対極に立っている……否、立とうとしているはずだ」

噛まれた親指が今度は舐められているのに癒しを感じながら、ライムは両目を瞑った。

「……うん。少し寝るよ。アリアンロッドに着くまで、まだ時間がある」

自分で思っていた以上に疲れていたのだろう。ゆりかこのようなバスの揺れにいざなわれ、眠りへとおちていくのに、一分とかなかった。

夢へ霧散していく苛立ちと疑問。

”死は個人にとって終焉である”——この大前提が失われたとき、人間はどうなるのか？

社会が、いや、社会の一部がこの問いへと真剣に向き合い始めたのは、つい最近、ほんの八十年前かそこらの話だ。

百年ほど前から始まった、犯罪発生率の急激な上昇。

とりわけ、強盗・強姦・殺人といった凶悪犯罪の発生率は、ひたすらに増加の一途を辿っていた。

テロリズム最盛期を乗り越え、世界中で貧困問題を解消しつつあった国際社会において、この現象は誰もが理解できないものだった。最大多数の最大幸福を——あくまでも経済的にはあるが——達成しつつあった世の中で、何故犯罪率が上昇しているのか？

多くの主張が叫ばれ、仮説がたてられたが、人々を納得させるものは一つとしてなかった。

何よりも奇妙だったのは、犯罪者達の自殺率が異常に高まっているという事態だった。

多くの者が留置所で、刑務所で、あるいは裁判所の控え室で自らの命を絶った。

遺書があることも、無いこともあった。

自殺の手段も様々だった。死に際の苦痛が少ないとされる手段をとる者が多かったものの、あえて苦しめる状況を作ったとは思えない者もいた。

社会は、血眼になって原因を究明しようとした。

言い訳を探そうとしたのだ。

『彼らは皆が死と破壊を尊ぶカルト教団の狂信者でした』といった類の言い訳——人々を安心させる物語を。

だが自殺者達に共通点などなかった。”少なくとも表面上は”。

現代においても、この異常現象の原因について社会的合意はない。

ただ、一部の人々には、はっきりとわかっていた。

アトマと呼ばれる人間が急増した時期もまた、百年前だったことを知る人々。

転生によって法の呪縛から解放された人間、その多くがどうなってしまうのかを、知っている人々。

そんな人々のさらにごく一部——社会に対する気高き理念と、そ

れを実現させるだけの行動力を持った者達が、活動を始めていた。

今から八十六年前。同じアーツマによるバウンティ・ハンター・システムを統括し、アーツマ犯罪者達の刑務所として機能する自由都市・アリアンロッドが設立。

社会は、変革を始めようとしていた。

『まもなく終点——アリアンロッド、アリアンロッドでございます。ご乗車のお客様は、お忘れ物をなさらぬようお願いいたします』

車内アナウンスで目覚めたライムが窓をのぞくと、外はすっかり夜になっていた。

進行方向の先に見えるのは、巨大な刑務所都市の圧倒的威容。天まで届きそうなほど伸びるサーチライトをはじめとした都市の光と、それらをぐるりと取り囲むようにしてそびえる高い高い壁。

多くの犯罪者達にとっての監獄であると同時に、ライム達賞金稼ぎにとつてのホームタウンであるアリアンロッドは、あの壁の中に多大な人口、知識、技術、そして経済を抱えている。

世界で唯一、アートの存在を公式に認め、アートのための制度を整備し、アートマ犯罪に対抗する術を持つ、一大自由都市なのだった。

ゲートを越え、バスはアリアンロッド内部へと入る。

あくびを噛み殺し、ライムは軽く両手を上げて身体をのばした。

膝上ではカグマが身体を丸くして眠っている。

「まだ寝てる……」

いつものことながら感心してしまった。バスに乗っていた時間の八割は寝ていたから、二十時間以上の睡眠になる。いくら子猫とはいえよくもまあ眠れるものだ。

わざわざ起こす意味も特になかったので、その小さな体軀をむん

ずとつかみ、背にしたバックパックの中へと放りこんだ。

むぎや、と鳴き声がきこえたが気にしない。この程度でカグマは起きないからだ。寝こみを襲われでもしたら、おそらく何も抵抗できずにやられるだろう。

運転手のいない自動操縦バスを前へと進んでいき、ライムは降り口付近の機械に親指をかざした。指紋認証によって口座から自動的に料金が支払われ、スムーズに降車する。

まったくいい時代になったものだ。

ライムがこの世に初めて生を受けた時代——つまりライムがまだ『一ターン目』だった時代は、硬貨や紙幣といった物的貨幣によって料金を払っていたと記憶している。

財布をいちいち取り出して、小銭の有無を確認しなければならなかったあの頃。

そんな煩わしささえも、今となっては懐かしい思い出。

降り立ったのはステーション内部だった。

同じバスだった乗客の流れに身を任せ、ライムもステーションの通路を進む。

清潔な壁と床は病院のような作りだった。窓はない。しかし天井にある白いライトの光は、淡く、優しく、来訪者達を迎えているように思えた。

突き当たりにある扉をくぐり、開けた場所へと出る。

そこでは簡単な手荷物検査が行われていた。

ライムの銃器は既に市へ登録してあったので問題はない。ただ、カグマを入れたままのバックパックを検査機へ放り込んでしまったため、係員を驚かせてしまった。そんな騒ぎの中心にいてもなお、

カグマは寝たままだった。たいした奴だという他ない。

ライムが奥へ進むと、人間一人がなんとか入れるほどの黒いボックスが建ち並んでいた。

空いているボックスを開けて中に入る。

内部は青い光に照らされ、金属製の椅子が設置されていた。数十年前まで使われていた死刑用の電気椅子に似ている。

腰掛けると、ヘルメット状の装置がライムの頭部を覆った。

賞金稼ぎ達が現場で行う簡易認証とは異なる、本格的な精神紋認証。

精神紋は、魂の紋様といっていいものであるらしい。詳しい仕組みは知らないが、そんなのはどうでもいいことだ。

重要な点の一つだった。

転生によって肉体を渡り歩く——つまり指紋や網膜といった生体情報がごろごろと変わるアートマにとって、”私が私であること”を証明するには、精神紋を示すしかない。

不定期に発せられる電子音をききながら目を瞑り、ライムはじつと時が過ぎるのを待った。

何かされているという感覚は一切ない。だが認証を終えてボックスから出る時はいつも決まって、若干のだるさを感じずにはいられないのだった。

『認証完了しました。登録ID・ライムIIアシユフィールド。ターン・スリー。登録転生タイプ・>再生者<。現ターンにおける生体情報は既に精神紋とリンクされておりますので、このまま左手通路へとお進みください』

ロビーへ出ると体感温度が二度は上がった。

これまでとは違ってかわり、人混みにあふれかえっている。行き交う人々の人種は様々だった。

はるか昔から移民を受け入れ続けてきた歴史を持つ大陸、その各地から人間達が——アトモも、そうじゃない者も——集まっているのだから、当然といえば当然ではある。

「まずはご飯かな……」

貧血による軽い目眩を感じながらライムは歩き出した。

やるべきことは色々あったが、物事には優先順位というものがある。

ライムの場合、具体的には第一が『飯』、次が『金』、その次あたりが『命』といったところ。

人と人の合間をうまく縫いながら、ライムがステーションの外へ出ようとしていた時だった。

「——おかえりなさい」

呟きに近い女の声が、喧噪の中、ライムの耳へと届いたのは。

「え？」

声の方角へと視線を向けて立ち止まり、ライムは息をのむ。

神話にそって描かれた絵画の一枚かと思える光景が、そこにはあった。

ロビー中央にあるベンチへと、見知らぬ女性が一人、優雅に腰掛けている。

美しい女性だった。

腰まで届く金髪は、艶やかに波一つなく流れている。

白いワンピースを着ているものの、肌があまりにも白く透き通っているため、服と地肌の境界はわからないくらいだ。

瞳は青く、淡いピンクの唇は引き結ばれている。

じつと、何かに耐えているように。

女性の周囲は不思議な空間と化していた。

ベンチは軽く三人が座れるほどの幅があるのに、誰も女性の隣には座ろうとしない。

圧倒的な存在感があるにもかかわらず、通行人達は女性へと目を向けようもしない。

まるで女性とベンチだけが、人々の認識する世界から外れているかのようにだった。

声も出せず、ライムはただ戸惑った。自分が話しかけられたのだという確証もない。

そうして目を逸らした次の瞬間にはもう、女性の姿は消えていた。幻でも見たのだろうか……。

バックパックの中でカグマが寝返るのを背中に感じ、ライムはハッとして我にかえった。頭を振りながら、今や誰も座っていないベンチへと歩み寄る。

「これは……？」

女性が座っていた場所に落ちていたものを拾い上げ、首を傾げた。雪のように白く、羽ばたく鳥のそれに似た、羽根の一枚だった。

小さな酒場にはまったく似合わない料理の前に座り、カグマが真剣な声で問う。

「このタイは？」

「大陸の西海岸でとれた、今が旬のものだ」

カウンターの中に立つ老人が誇らしげに答えた。この店のマスターで、名をジーンという。ライム達にとっては、三年前に初めてこの都市を訪れて以来の顔なじみだ。

「米は？」

「東方から取り寄せた、粥に最適の品種だ」

「茶は？」

「カフェインの少ないほうじ番茶。もちろん最高級」

「さすがの仕事だ、ご主人。痛み入る」

一礼し、カグマはタイ茶漬けの盛られた椀へと口をつけはじめた。

「おか、わり」

一方のライムといえば、既に何枚もの空き皿をテーブルへと重ねつつ、さらなる料理へと取りかかっている。

食事中はいつも、口が二つあればいいのにと思わずにはいられない。

おいしい料理を食べるという行為には、常に葛藤が存在しているものだ。よく噛まねばならないと自分に言い聞かせつつも、すぐに飲みこんで次をほおばりたいという欲求と戦わねばならない。だから口は素早く噛むのに大忙しで、注文のために喋る暇すら惜しいのだった。

「食つか喋るかどっちかにしろ」

そんなライムを見たジーンがおおらかに笑った。

「だいたい、おかわりとだけ言われてもわからん。どの料理の話だ？」

「さっき、頼んだ、のを、全部」

「……ま、こつちとしては商売繁盛で助かるがね。ツケにせずちゃんと払ってくればの話だが」

ジーンの後半を、ライムは聞こえなかったことにした。

といっても、ケネスの賞金が入ったから、今はまだちゃんと代金も支払えるはずだった。今はまだ。

追加が来る前に残りの料理も食べ尽くし、一息ついた。

テーブルに肘をついてカグマを見ると、茶漬け一杯をまだちびちびとやっている。少し口に含んではアグアグと噛む仕草が、いかにも子猫だ。

「食べるの遅いなあ」

からかったつもりなのだが、返ってきたのはきつい言葉だった。

「料理”とは、食べるものではない。味わうものだ。”餌”ならば、お前のようにかきこんでもかまわないが」

「猫に言われた……」

そこでカグマが腕から一旦顔を上げ、向き直った。ライムは嫌な予感に顔をしかめる。この姿勢、説教が始まる前兆だ。

「それにだ。お前は作法というものがなっていない。女にあるまじきことだ。今だってそう。机の上に、肘などつくものではない」

「うるさいなあ……。勘定はわたし持ちなんだから、ちょっとは慎ましくしなよ」

「そういう契約だろう、私とお前の」

「ぐっ……」

言い返せずにライムは渋々と肘を上げ、背筋を伸ばした。

逃げるようにカウンターを見ると、ジーンがピザか何かをオーブンから取り出していた。チーズの焼けるいい匂いがしていた。

「私はお前に戦い方を教える。お前は賞金稼ぎとして私の食費を払いながら——むぎゅあ」

カグマの言葉は途中で遮られた。背後から伸びる手に、両頬を押

さえつけられている。

「——ネコさん！」

幼い女の子が、目を輝かせながらカグマへと抱きついていた。

「ぬえこひゃんえあぬあい、ふあふまふあ」

「！　しゃべった！　でも、ネコ語じゃわからないよ？」

ぶるぶると首を振ってカグマは女の子の手を払いのけた。

「猫さんではない、カグマだ」

「！　ネコさんすごい！」

「だから猫さんではないと……」

はしゃぐ女の子を前にしてカグマが戸惑っているところへ、ジーンが焼きたてのマルゲリータを持ってきた。バジルとチーズとトマトのみという、シンプル・イズ・ベストを体現したピザだ。

「シエス。調子いいのか？」

「うん！　だいじょうぶだよ、おじいちゃん」

「おじいちゃん？」

カグマが驚くのへ、ジーンが曖昧にうなずく。

「色々あつてな。息子夫婦のところから引き取ったのさ」

「ふむ。なるほど」

察するところがあつたのか、カグマはそれ以上深く訊こうとはしなかった。

一方のライムはマルゲリータにしか興味がなく、会話へは不参加を決めこんでいた。

椅子を静かにずらすことで離れたニメートル先では、シエスと呼ばれた女の子がカグマに夢中となっている。

「ネコさんは、どうしておはなしができるの？」

「だから猫……もういい。そうだな、人の言葉を話せる理由は……私にもわからない」

「え？ わからない？」

大きな瞳をさらに大きくするシエスの前で、カグマは神妙にうなずいてみせた。

「うむ。私には過去の記憶がない。否、多くのことを憶えてはいるが、思い出せないこともまた多いのだ。情けない話だが」

「ふっん……」

よく意味が飲みこめていないのだろう。シエスは首を横に傾げながらうなずいていた。

「でもネコさんなら、カワイイからだいじょうぶだよ」

「何が大丈夫か理解できないのだが、それもまたいいだろう」

カグマはまんざらでもない様子で茶漬けを味わっていた。ライムに対する態度と違って、子供には優しいようだ。

二人の会話を遠巻きに眺めるライムの横へ、ジーンがスパゲッティを置いた。

「しばらくはこの都市にいるのか？」

「うーん……賞金首でめばしい奴はいる？」

「今は時期が悪いな。よさそうな獲物はどれも遠出になるぞ」

ジーンはたくわえたヒゲをなでながらうなった。

優秀なのは料理の腕だけではない。情報屋としてのジーンも頼れる存在であり、ライム達がアリアンロードを拠点としている理由でもあった。

「そっか。じゃあしばらくいるよ」

ライムはスパゲッティの皿を引き寄せてタバスコを半ボトル分ふりかける。先程も半分使っていたので、ボトルは空になってしまった。

「なあ、お前さん子供は嫌いかな？」

激辛スパゲッティの至福を味わっていると、ジーンがぼつりと聞いてきた。

長いパスタを一通りすすりきってから、ライムは訝しげに問い返

す。

「どうしてそんなこと訊くの」

「嫌いじゃないなら、お前さんもシエスにかまってももらえると助かるからさ。この都市には、友達になれる子は少ないからなあ」

口調とは裏腹に、ジーンの声からは切な想いが感じられた。

無理もないな、とライムも思う。

アリアンロッドには子供が少ない。この都市にはアーツマ非アーツマ問わず多くの人間達が住んでいるが、子供を作ろうとする者は稀だ。

その理由は明白だった。

アリアンロッド市民は皆、知っているからだ。アーツマという存在がこの世にいることを。

”生まれてくる自分の子供が、アーツマであるかもしれないという可能性を”。

「悪いんだけど、わたし、子供は嫌いだから」

「なに、そうだったのか？」

沈んだ様子のジーンの前に、ライムはスパゲッティをフォークで絡め取りながら答えた。

「立場が対等じゃないからさ。子供とつきあっても、わたしが得することは何もない。ギヴアンドテイクな関係が成り立たない。今だって、あなたの料理が絶品じゃなければ、話なんかしてないだろうね」

それにね、と水を一口含んで続ける。

「あなたは忘れてるかもしれないけど、わたしはアートの三ター
ン目だ。今までを合計すれば五十年近く生きてる。子供扱いされて
も困るよ」

「……そうか、すまなかった」

「まあ、いいんだけど」

ばつが悪くなったライムはさらなるスパゲッティへと逃げた。

ジーンのようなアートのまでない人間と話すと、時々こういったす
れ違いが起こる。彼らはわかっていないのだ。いや、頭でしか理解
していないというべきか。

生まれ変わり、外見が幼くなっても、精神まで幼くなるわけでは
ない。

そんな素晴らしいことは起こりえないのだ。

あつという間にパスタをたいたらげ、ライムは両目を細めて息を吐
いた。

もし、精神が退行できるのなら。もし、もう一度自分の心を作り
直せるのなら――。

そこまで考えて、馬鹿らしさに苦笑いした。ありえないことを夢
想できるだけ、まだまだ自分も子供なのかもしれない。

ふと目を向けると、いつの間にやらシェスにみつめられていた。
水の入ったコップをどんと鳴らして脅され、幼い女の子は小動物

のように身を引く。ぎゅっと抱きしめられたカグマが苦しそうにもがいていた。

——まったく、子供相手に嫌な奴だ。

内心で自嘲しながら残りの水も飲み干し、ライムは席を立ってレジへと歩き始めた。

シエスは震えながらもまだライムを見つめている。にらみつけてやると、今度こそ完全に二人のつながりは断たれた。

「……それでいい」

誰にもきこえないよう、小さく呟く。

それが最善だった。

こんな嫌な人間には、関わるべきじゃない。

壁と床が強化素材でできた、レンタル制の戦闘訓練場。ただしスポーツ向けとしても貸し出されているからか、内装はいかにも体育館といった趣だった。

トリガーを連続で絞りながら、ライムは唇を強く噛む。銃撃は一度としてカグマを捉えていなかった。その影にかすることさえも。

「無駄が多い」

たった一言を述べ、カグマが壁を蹴った。両者の距離が急速に縮まる。小さな足に伸びた爪が煌めく。

一人と一匹の交錯。

放ったロープは空を切り、銃弾は壁に当たって虚しい反響音を鳴らした。

「くそっ」

ライムは自らの首筋をおさえた。たった今できたばかりのかすり傷から、血がわずかに流れ出ている。

かすり傷といっても、あくまで手加減された上での結果だ。本来なら頸動脈を掻き切られていたはず。いや、首を落とされていた可能性の方が高いか。

圧倒的な戦闘力の差がそこにはあった。

傷が急速に治癒していく熱を感じながら、大きく息を吸って気持ちを切り替える。

集中が必要だった。訓練が始まってからつけられたかすり傷は六

つ。つまり、既に六回は首を落とされているということ。

「>支配率<の高さを活かしていない。筋力はそれ以上出すな、無駄だ。力を出すべき箇所、力を抜くべき箇所を明確に把握し、コントロールしろ」

空間を縦横無尽に移動しながらカグマが言った。とんでもないスピードだった。前後左右から声が聞こえてくるので、ライムが乗り物酔いに似た感覚に襲われてしまうほどの。

「わかってるさ、わかってるとも」

「真に理解しているならば、実行は容易い。実行できないのは理解が及んでいないからだ」

言われた次の瞬間には、七つ目のかすり傷が増えていた。

「お前の支配率なら、私の攻撃に反応くらいは出来るはずだ。後は、そのぎこちない動きをなんとかすればいい」

「言いたい放題言ってくれるね」

頭に血がのぼっているのに気づき、ライムは慌てて精神を落ち着けた。これも訓練の一つだった。相手の言動にいちいち心をぐらつかせているようでは、賞金稼ぎの仕事などこなせない。

「それが師というもののつとめだからな。さあ、来い」

立ち止まったカグマが尻尾をひよいひよいと振って挑発してきた。ライムも両手をだらんと下げ、全身の力を抜く。

「……いくよ」

呼吸を整え、神経を研ぎ澄まし——もう一度、支配率を引き上げた。

知覚が、加速を始める。

『魂』と『肉体』の支配率が、『五〇：五〇』の初期状態から変化していった。互いに影響し合っていた両者の均衡が崩れる。魂は勢力を増し、肉体への命令権を強めていく。一方、肉体が魂へと及ぼしていた影響——すなわち疲労感や苦痛が軽減され、無用な意識の乱れが取り除かれていく。

どこまでもクリアな意識。明瞭な思考。

ワックスで磨かれたつるつるの床を蹴り、ライムは飛び上がった。

支配率六〇：四〇。六五：三五。そして七〇：三〇——筋肉はリミッターを外され、本来なら考えられないほどの膂力を発揮する。筋繊維の収縮と弛緩、その一つ一つが意識され、精密にコントロールされ、洗練されていく。

地面から十五メートルの高さにある天井、そこに張り巡らされた鉄骨の一本へとロープを絡ませ、ライムは左手一本でぶら下がった。銃を持ち上げ、照準をつけ、トリガーを引き、反動を処理する——これら一連の動作の中で使用される、何十、何百もの筋肉を一つ一つ意識的に制御し、肉体に任せっきりだった場合よりも遙かに高速かつ正確な射撃が実現される。

そうして放たれた銃弾すらも全て回避し、カグマが叫んだ。

「まだだ遅い！ 肉体に好き勝手させるな。細かい動きすべてを統

率しろ。筋肉を、神経を把握し、命令し、服従させる。一瞬一瞬で理想的な動きをその都度組み立て、お前を構成するすべてのパーツを一つの動きに向けて団結させる」

「無茶苦茶言うなあ……」

鉄骨へと巻き付けたロープによって宙を舞いながら、ライムは苦笑した。が、カグマが言う限り、それは努力次第で可能な無茶苦茶であるはずだった。

いつだってそうだ。カグマはライムのためになることしか言わない。ライムが強くなるための、最も短い道筋を示してくれる。事実、出会ってからたったの三年半でライムがここまで賞金稼ぎとしての実力を身につけられたのは、すべてカグマのおかげなのだから。

「やってやる。見てろ！」

「うむ。やってみろ！」

二人は互いに叫んだ。楽しそうに。本当に楽しそうに。

鉄筋からロープを外し、ライムは上空から一直線にカグマへと飛びかかった。

銃撃による成果を上げられないまま着地。当然のようにカグマの姿はなかった。死角に入られたのか、視覚による位置把握は追いついていない。代わりに、研ぎ澄まされた皮膚感覚が空気の流れを読んだ。

——真後ろ。

そう結論づけ、ライムは振り向きもせず腕だけをまわして発砲した。攻撃結果など確認しない。その一瞬が無駄だ。勘定をいちいち気にしながら食事を注文するくらいは無駄。銃弾は外れたという

前提で次の行動を開始すべきだったし、そうしていた。

襲い来る爪を寸でのところでかわしつつ、立て続けにトリガーを引いた。

銃弾は相変わらずカグマの実体を捉えられない。

しかし、カグマの影になら当たるようになってきた。

訓練場へと射しこむ陽光によって形作られる、長い長い影——その末端、駆けて揺れる尻尾のシルエットに届くくらいには、照準が合ってきていたのだった。

「まずまずだな」

その声が聞こえる寸前には既に、ライムは側方へ身体を投げ出している。

首筋付近を風圧——というよりカマイタチに近い迅風が駆け抜けていった。

カグマの右手によるなぎ払い。先程までと比べて明らかに力強い一撃だった。かわしたはずなのに、首のかすり傷が八つ目をカウントしている。

首の痛みに思わずぞっとした。横っ飛びが少しでも遅れていたら、かすり傷では済まないことになっていたところだ。

「上等。ぞくぞくするね」

ライムは瞬時に理解していた。

手加減のレベルが下げられたのだ。こちらの動きがよくなったのを感じ取り、カグマもそれに合わせてきたのだろつ。

これがカグマの厳しさだった。気が抜けない——訓練中でも一歩間違えれば殺される。

もちろんライムの銃にだって実弾がこめられていた。殺し合いだった。死線の中でしか実力は上がらない——カグマはいつもそう言っている。

死んだら死んだで、私達ならどうとでもなるだろう、とも。

カグマは訓練場内を動き回っていた。

いや、跳ね回っていたと言ったほうが正しい。壁を、床を、天井を蹴り、立体的な動きでライムを翻弄しようとしていた。

段階が上がっていたのは、攻撃の苛烈さだけではないようだ。目で追いきれないほどのスピードと、動きを読ませない奇抜さ、ランダムさ。いくら支配率を上げたところで、もはや単純な五感では読み切れない段階だった。

ならば。

ライムは両目を瞑り、カグマの動きを追うのも、読むのも止めた。無駄なことだったからだ。何かが見えるということは、時に、その何かに振り回されるということでもある。無駄なりソース消費は即座に切り捨てるべきだった。選択と集中。自分の限られた意識を、より効率的に運用するための。

感覚を、指先のみに集中した。

胸に巻き付けていたロープを解放し、自分の周囲へと張り巡らせる。蜘蛛の巣のように、子猫すらくぐれないほどの細かい網目で。

こういった狭い空間でこそ使える、簡易な結界だった。といっても、防御性能そのものは期待できない。特殊な繊維を編み込んで作られたロープは相当な強度だが、カグマの前ではそれこそ蜘蛛の糸同然だろう。

重要なのは、たとえロープが切り裂かれてしまったとしても、カグマが襲いかかってくる方角をすばやく察知できるということだった。

た。

巢の中央で、ライムはじっと獲物を待ち構え続けた。

ロープを握る手が震えていた。

カグマが裏をかいてくるんじゃないか。自分が考えつきもしなかった方法で、結界を抜けてくるんじゃないか。獲物とは、自分のことなんじゃないか。

そんな恐怖と不安を押しこめながら、ライムは待った。張り巡らせたロープのどこかが切られる瞬間を。

しかし、カグマは来なかった。

ライムはロープだけに集中していた。神経がすり切れて、指先の痛みを幻覚するほどに、長い間。

だからカグマが戦闘を止めて呼びかけていることにも、しばらく気づけないでいた。

自分の肉体、その指先以外の箇所で、何が起きているかにも。

「——おい、きけ！　ライム、訓練は終わりだ。——ライム！」

「えっ？」

目を開けて集中から解放された途端、ライムは膝から力が抜けていくのを感じた。

床に両手をつきながら、全てを理解する。自分に何が起こったのかを。そして、カグマが訓練を止めた理由を。

床に血が広がっていた。

それは間違いなくライムの血だったが、カグマに傷つけられて流

れたのではなかった。

外傷はない。

誰のせいでもなかった。

あえて言うならば、神様のせいで流れ出た血だ。

「あー……。最近、調子良かったのになあ」

自分の口が吐血しているのを把握し、ライムはぼんやりと呟いた。ライム自身の体細胞が赤黒い粒となって固まり、血溜まりの表面にうかんでいる。

「すまない、私も油断していた。お前の体調がここまで悪化していたとは……」

身体が赤く染まるのもかわらず、カグマはライムの膝へと前足をのせた。その声は動揺し、目一杯の気遣いに満ちている。

「ちょっと……行ってくる。悪いんだけど、この床片付けておいてくれない？ 罰金くらっちゃう」

ここがレンタル制であることを憂慮してみせながら、ライムは立ち上がって歩き出した。

うんざりしていた。

本当は、ライムの方こそ謝りたかったのだ。カグマの美しい灰色の毛が、血で汚れてしまったから。

だが言葉には出せなかった。

血文字で『ごめんね』とでも書いてやろうか——そんな冗談がうかんだ。悪趣味さのあまり、ひきつるように笑ってしまう。

口の端にできた血泡を噛みつぶすと、鉄の味が舌一杯に広がっていった。

同心円状に広がるアリアンロードの街並み。

その中央には、東西へ向かって巨大な断層が走っている。その断層は、都市の南北間に百五十メートル以上の高低差を作りだし、断層より北半分を『上層』、南半分を『下層』に区分していた。

断層と垂直に交わる角度で、都市の中央を北から南に向かって流れるのは、幾つもの水流が一本に寄り集まってできたエイル大河だ。河幅は七百メートルを優に超えており——人々は、隔てられた東と西の区間をつなぐ何本もの大橋の上から、あるいは年中無休で運行されている定期船の上から、大いなるエイルの清らかな流れを眺め、堪能することができる。

そして、断層と大河が交差する場所——都市の中心で轟音をたえず響かせている莫大な水流の落下点こそが、『アリアンロードの滝』と呼ばれる世界的に有名な大瀑布だった。

この滝と、その隣に佇む壮観な高層建築物の二つは、刑務所都市の二大観光名所として知られている。

アトマ犯罪者収容施設——フラウ・ゲフェス。

断層崖へと張りつくように建てられた、一見すれば古めかしい塔とも呼べる威容は、地表に出ている部分だけでも断層の八割、つまり高さ百二十メートルにまで到達している。地下を含めた全長となれば、二百や三百メートルは超えるといわれているが、実際の詳しいデータをライムは知らない。

刑務所都市であるアリアンロードの中心、かつ最重要施設であるフラウ・ゲフェス内のエレベーターに、ライムはいた。

カグマもおらずたった一人で、武器すらも持っていない。だが心配はなかった。当たり前の話だが、ここは刑務所の中。銃やペツト——こう表現されるのはカグマにとって不本意だろうが——の持ちこみは禁止されている。もちろんセキュリティも万全。なにせ、大陸中から集められたアトマ犯罪者達を収容しているのだ。仮に何か異変が起きて、それが囚人達の脱走を招きでもしたら、とてつもない騒ぎとなってしまうだろう。

エレベーターは地上二十五階で止まった。鉄の箱から降りて一本道の通路を進んだ先には扉があり、すぐ横の壁にインターホンが取り付けられている。白壁の内装といい、いかにも診療所といった感じのフロアだった。

だが、実際はそうではない。

このフロアも間違いなく監獄だった。この先にいる”たった一人の囚人”のためだけに設けられた、広い広い檻の中なのだ。

ライムはインターホンを押し、天井角につけられた監視カメラを見上げた。扉が自動的に開き、来客を、いや患者を招き入れた。

「いらっしやい。一年半ぶりかしら？」

入ってすぐのロビーを抜けた先の部屋。中央に置かれたシックなソファに座り、ライムへと手を振っている服役囚がいた。といっても、着ているのは囚人服ではなく白衣だったが。

「そうだね。久しぶり、って言ってもいいのかな？ ドクター」

「微妙なところだわねえ。今は昔と違って、一年一昔というけれど」

紅茶のカップに口をつけながら、ドクターと呼ばれた人物は微笑んでみせた。軽くかきあげた長髪が柔らかに流れる。

「ドクターは、うんざりするくらい変わってないけどね」

ライムも笑いながらドクターを見た。

ライムの記憶によると、ドクターは現ターンで四十代に突入しているはずだったが、どうみても二十代にしかみえない。

線の細い美貌をしているが、本人曰く生物学的には男なのだという。『超絶美形天才科学者』という自称も確かにうなずけるほどの容姿であるものの……。いくらかの顔見知りであるライムからすれば、その自称の頭に『残念な』という言葉を付け加えざるをえない。

「アナタは変わっちゃったわ……なあに？ その身体は」

突然立ち上がったかと思うと、ドクターは勢いよくライムへ詰め寄った。その細面が鬼の形相をうかべている。

「は？」

「この身体よ！ どういうこと！？ 前に会った時はまだ、男の子みたいだったのに。ワタクシ好みのボーイッシュな天使だったのに！」

ものすごい力でライムの右肩をつかみながら、ドクターは身体をあちこちをつついてきた。

「ちょ、どこ触って……」

「こんなに育っちゃって。女らしくなっちゃって！　嘆かわしい、嘆かわしいことだわ！」

そんな絶叫に耳を塞ぎつつ、ライムはドクターの痩せた長身を蹴り飛ばした。

そして自らの思い違いを知る。この建物内が安全だなんて嘘だ、やっぱり銃は必要だった。

「うるさいなあ。だいたいなんだよ、男の子みたいだったって。馬鹿にしてるの……」

文句は言うものの、ライムの心に嫌悪の感情はうかんでこなかった。どうみても行動が変態であるにも関わらず、いやらしさを感じさせないのは、その中性的な容姿からなのか。それともドクター本人の個性からなのか。

「死ねばいいのに。今すぐ死ねばいいのに。死んで生まれ変わって、あの頃に戻ればいいのよ。性的に未分化だったあの頃に」

吹き飛ばされてソファにもたれかかったまま、ドクターは真顔でぶつぶつと呪詛を唱えた。

「男がほしいなら他をあたって」

「美しいコじゃなきゃだめなのよ」

「……頭痛くなってきた」

「あら、不調がついに脳まできちゃったのかしら」

おどけた口調とは裏腹に、ドクターは切れ長な目元を突然引き締め、眼鏡の位置を直した。

ライムも表情を硬くしながら、口元だけで笑ってみせる。

「だったら、治してくれるわけ？」

返答は、もちろん無かった。

始めから期待もしていない。

聴診と触診の最中、ドクターは常に小声で呟き続けていた。内容は聞き取れないが、どうやら真面目に診察してくれているらしい。ならばライムがとやかくいうこともなかった。

「興味深い。とっても興味深いわ。ふふ……」

ただ、ときどきうつとりした表情で涎を拭うのだけはやめてほしかった。気味が悪いし、自分が実験動物にでもなった気分だ。事実、実験動物なのかもしれないが。

一通りの診察を終えて考えこむドクターに、ライムは問いかけた。

「で……」 今回のわたしは、あと何年もつ？」

「変わらないわ。あと三、四年」

ドクターはあっさり返答した。

「アナタの言っていた一ターン目、二ターン目の時と同じか、それより早くかもしれない。二十歳のハッピー・バースデイを迎える前に、アナタは死ぬわ」

「そっか。やっぱりね」

「落ち着いてるわね？」

「死ぬのにも、もう慣れたからね。こいつの原因も、まだわからない？」

自らの胸の中心を親指で示しながらライムは淡々と訊いた。ドクターの言葉が慎重になる。

「発作の原因なら、仮説はたててあるの。はつきりとは言い切れないけどね」

「教えて」

「きいても、現状は変わらないけれど……まあいいわ。アナタ、転生タイプは>再生者<だったわよね？」 何度でも、同じ形をした肉体へ転生するタイプ”。これが問題だと思うの”

ドクターが急に転生タイプの話を持ち出したので、ライムは戸惑った。

いわゆる、転生の仕方——どんな肉体へと生まれ変わるかについて、その傾向にはアトマ間で違いがあるといわれている。

たいていのアトマは、性別や人種が固定される一方、細かな容姿や体型、身体能力などが転生のたびに変わるものだ。そういった『普通のアトマ』から外れる者については、アリアンロードの研究機関により、転生タイプと称される特殊類型があてはめられていた。

だからといって、転生タイプがどうしたという話なのだが。

「再生者なのが問題だなんて、当たり前じゃない。なにをいまさら……」

ライムは眉間にしわを寄せた。ドクターに言われなくても、わかりきった話だった。

もし自分が、再生者じゃなかったら。

もし、今とは違う形の肉体へと生まれ変わるのなら。
なにも問題はなかったはずなのだ。

発作の原因がなんだろうと、どうでもいい。不治の病だろうとか
まわらない。

なにせ、再生者以外のアトマなら、”そのまま死ねばいいのだ”
。死んで、健康的な肉体へと生まれ変わればいい。それだけの話
だった。

だがライムは違った。この世に生まれ、病によって二十になる前
に死に、また同じ奇病を持って生まれてくる。長生きなんだか短命
なんだかよくわからない、ジョークのような人生だった。このいか
れた運命の輪をどうにかしたくて、二年前、ジーンの紹介でドクタ
ーを訪ねたのだ。

「違うわよ。もう、話を最後までききなさいな」

ドクターは唇を尖らせ、ライムの額をつついた。

ただし、いくらかの殺気をこめて。

ライムすら反応できないほどのスピードで。

「——再生者には、とっても不思議な特徴があるわ」

ライムの額から流れ出る血を指先ですくい、舐め取りながら、ド
クターは説明を続けた。

「自己再生能力。アナタ達は、多少の傷ならすぐに治してしまう。もっとも、再生には『痛み』と『血液』を必要とするみたいだけど」

殺気は既になく、いつものふざけた調子に戻っている。

「お、驚かさないでよ」

爪の先ほどの小さな傷が癒えるのを感じつつ、ライムはそろそろと息を吐いた。背筋はまだ凍りついたままだ。

ドクターは時にこうしてライムをからかってくる。遊ばれているのだ。『面白い病状だから』という理由で無料診察を受けている立場ではあるが、正直勘弁してほしい。

「再生者は、同じ肉体の形で生まれ変わる。再生者は、己の傷をすぐに治せる。この二つの特性は、一見無関係にみえて、根は同じ『魂の恒常性』によって成立している――。ワタクシは、そう考えているわ」

「魂の……恒常性？」

「そう。魂が”アナタの形”を憶えていて、肉体をその形に保とうとするってこと。違う肉体への変化を拒否し、肉体の欠損をただちに修復する。どちらも、恒常性が発揮された結果なのよ。わかるかしらん？」

「なんとなく、だけど。でも、それと病気になんの関係が？」

「アナタの身体にある異常、頻繁に起こる発作の原因は、おそらく病気じゃない。完璧な再生者ゆえの帰結、ただそれだけにすぎないのかも」

ドクターはライムの右手を取り、五指を広げさせた。

「一口に再生者といっても、”程度”があるわ。大抵の再生者は、外見や潜在的身体能力が前世と同じってのがせいぜい。けれどアナタは、前世の完璧なコピーとして生まれ変わってるわよね。連邦のデータベースにちよつと進入して調べてみたんだけど……アナタ、指紋すら同じでしょう？ 十六年前の自殺者リストから、今のアナタと一致する指紋を見つけちゃったのよ」

突然の指摘に取り乱すのをなんとか抑え、ライムは頬杖をついた。

「勝手に過去をかぎまわられるのは、あまりいい気分じゃないな」

「いいじゃない、大目にみなさいよ。でね、ここからが本題なんだけど」

一方、ドクターの態度は相変わらず軽い。

その軽さを見ているうちに、ライムの怒りも宙へうかび、散っていった。

必要なのはただのデータで、過去なんてたいして重要じゃない。

その意味するところなど気にもしていない。そう言われているように思えたのだ。

「再生者であるが故の魂の恒常性、その働きがアナタの場合は強すぎて、肉体が耐えきれずにいるんじゃないかって思うの。要するに暴走してるのね。癌に近いものだってイメージしてくれば、少しはわかってもらえるかしら」

「ふうん……。なるほどね」

「そつちから訊いてきたわりには、なんだか興味なさそうね」

ドクターは手をひらひらと振った。ライムも頭の後ろに手を組み、背もたれへともたれかかる。

「だって結局、再生者なのが問題だってのは変わらないじゃない」

「大きく違うわよ。ただの病気なら、科学でいつか解明できる。けれどあなたのそれは、おそらく、科学じゃどうしようもない」

「どうして？」

「観測ができないから」

ドクターは立ち上がって、診察室の隣にあるキッチンで紅茶を淹れ始めた。

「観測できないものに対して科学は手を出せない。そして、魂は観測できない。アトマに關係する現象には常に魂が関わってくるけれど——そもそも魂ってなんなのよ？ そんなことすらも、ワタクシ達はさっぱりわかってない。肉体への対処療法、アナタの場合なら細胞分裂を抑制する薬を投与したりなんかはできるけれど、根本的な治療は無理ね」

上品な香りを含んだ湯気を立ち昇らせながら、チョコレート・ケーキもついたティーセットが運ばれてくる。いつもならすかさず飛びついているはずだが、今のライムは食欲がなかった。

「……そっか」

不安はあふれ出て止まらずにいた。

一生、自分はこのままなのか。一生どころじゃない。一つの一生を終えても、始まるのはまた次の一生だった。

ドクターが紅茶を一杯すすり、わざとらしい深刻な表情を作った。

「アマリ、キヲオトサナイデ」

「励ましてくれるのはいいけど、その棒読み、もうちょっとなんとかならないの」

なんとか微笑むのに成功した。どうにもならない気持ちを振り払うため、勢いこんでフォークを握る。ケーキのビターな甘みへと意識的に酔いしれ、紅茶を一気に飲み干した。紅茶一杯のためなら、世界など滅んでもいい——そう昔に言ったのは誰だったか。

「っと。ちょっと失礼するわね」

ニコニコとライムの様子を眺めていたドクターが、両目を閉じてうつむいた。どうやら体内通信で誰かと喋っているようだ。

その場で黙り込んだドクターを前にして、ライムは手持ちぶさたになってしまう。紅茶とケーキは素晴らしい味だったが、いかにせん量が少な過ぎた。

診察も終えたし帰ろうかと腰をうかせると、今度はドクターの右手に止められてしまう。どうやら、まだ何か用があるらしい。

何もしないでいるとまた気持ちが暗くなるのがわかりきっていたので、何か別なことに興味を向けることにした。

周囲を軽く見回してみただけで、”それ”はみつかった。

清潔な部屋、上等な紅茶とケーキ。カップや皿は高級そうな陶器で、テーブルやソファもしっかりとしたものだ。ライムのように、常日頃から財布の薄さと胃袋の空き具合に頭を悩ませる生活とは、ほど遠い世界。ここがドクター一人を収監しておくための監獄だといふのは、あまりにもおかしくはないだろうか。

体内通信の件だつてそうだ。一昔前でいう携帯電話並に、一般にも普及している技術ではあるものの、体内通信装置の所持を囚人が許可されるとは通常考えにくい。

明らかにドクターは他の服役囚と違う。
特別扱いされているのだ。

いったい、ドクターは何故つかまつたのか？
そして、ここぞなにをしているのだろうか？

そんな二つ疑問が、ライムの中で今さらのようにわいた。前々からなんとなく感じていたことではあったのだが、質問してみるにはいい機会かもしれない。

通信を終えたドクターにさっそく尋ねてみると、嬉しそうな笑みが返ってきた。

「あらちょうどいいわ。神様のお導きかしら？ とても、とってもいい具合じゃないの」

ついてくるよう手招きしながら歩き始めたドクターの背中を見て、ライムは低く呟いたのだった。

「やっぱり、帰るべきだったかなあ……」

一度として鉄格子などは通過せず、ドクターはあっけなく牢獄から出て、エレベーターの中に入った。

手錠すらかかってないとアピールしているのか、その両手をぶんぶん回してみせる。

「自由でしょう？ ワタクシへの拘束は存在しないわ。だって意味がないから」

「意味がない？」

エレベーターの下降を感じながらライムは言葉を反芻した。

そこで初めて気づく。フラウ・ゲフェス内におけるアトマ犯罪者の『拘束』とは、どういったものなのだろう。

”自分は、それを知らない”。

賞金稼ぎとしてのライムの仕事は、犯罪者を捕らえ、アリアンロッドが統括する機関に引き渡すまでだ。

それまでの拘束方法ならば、もちろんわかる。両手両足の自由を奪い——その際の手段は問わない——だが決して殺さないように、つまり自殺もさせないように、がんじがらめにするのだ。捕らえられたアトマ犯罪者にとって、死は逃亡手段の一つなのだから、当然の処置といえる。

しかし、刑務所に入ってから？

どう拘束されるというのか？

「ワタクシを拘束する方法はない。だってワタクシ、いつだって逃

げられるから。支配率を上げて脳内物質を操作すれば、自由に自殺できるんだもの。手足を封じられたって関係ないのよ」

地下十二階を表示したところでエレベーターは止まった。歩き出るドクターを追いながら、ライムは驚きを隠せずにした。

「やっぱり変態なんだなあ、いろんな意味で」

脳へと命令を下して支配するのは、肉体操作の中で最も難しい技術の一つだ。脳が魂と肉体をつなげる媒介であり、限りなく”魂に近い肉体”だからというのがその理由とされている。

魂は、魂自身を支配できない。

”わたし”は、”わたし”をどうにもできない。

「ねえ……わたし達、どこに向かっているの？」

ライムの問いが一本道の通路に反響していた。内装はやはり白で、先程の階と違いは無い。ただ、薄暗さと冷たく湿った空気のせいかな、ライムの受ける印象は違っていた。診療所というよりも、入院施設といった感じだ。

「囚人達の監獄であり、ワタクシの研究室よ」

フラウ・ゲフェスに来てから初の鉄格子を抜けたところで、ドクターが振り向いた。

「準備はいいかしら？　ここを一般人に見せるのは、アナタがハ・ジ・メ・テ」

艶やかな声と共に、鋼鉄の扉が開かれる。

広がっていたのは、心のどこかで予想していた光景。

違ってほしかった惨状。

ドクターとは違い、自由に自殺なんかできない者——ごく一般的なアトマ犯罪者達の末路だった。

「……最高に悪趣味だね。反吐が出るよ」

前髪をかきあげる手を額にあてたまま、ライムは目を鋭く細めた。

闇の奥へと伸びる通路。

左右に連なる部屋の様子が、大きな窓を通じて見えた。部屋の一つ一つに囚人達の寝台が置かれている。部屋は静かで清潔に保たれており、監獄というよりも病棟のようだ。

点滴か何かの管をつけた囚人達は、皆が身じろぎ一つせず横たわっていた。眠っているわけではない。口にはマスクがはめられ、囚人服の代わりに拘束衣が着せられていた。身体の自由を制限されているのだ。

「こんな環境で何十年も……」

歪んだ自分の顔がうつすらと反射している窓へと手をあて、ライムは囚人の様子を近くからみつめた。

自殺を防ぐためとはいえ、人権という言葉が欠片も見あたらない場所。拘束衣には身体がいくら動けるだけの余裕があるようだったが、囚人達はそのわずかな自由すらも放棄しているようだった。長い年月が、囚人達を生きた死体へと変えたのだろう。半端に開かれた瞳に光はなく、眼球の動きさえもない。ただ、定期的なまばたきがあるだけで。

「みんながみんな、こんな待遇つてわけじゃないわ。刑期五十年以上か、もしくは過去に脱獄経験のある囚人達だけ。その中からさらに、自らの意志で希望した者だけが、今、ここで罪を償っているのよ」

「希望した？ 償うつて何の話？」

ライムの声は若干うわずっていた。

卑怯な義憤がどうしようもなくわき出て止まらなかった。自分も賞金稼ぎとして、片棒を担いでいる——その罪悪感から逃れたかった。だが逃げ場はどこにもなかった。この囚人達と同じで。

「アナタは訊いたわよね。ワタクシは何の罪に問われたのか？ ワタクシはここでなにをしているのか？ 答えはこうよ。」ワタクシは、人体実験をして捕まった”。そして”ワタクシは、今ここで人体実験をしている”——もちろん市の命令に沿ってやってるんだけど、それにしても笑っちゃうわよね。捕まる前と後で、やってることが何も変わらないんだから。だからワタクシは、ここから逃げ出す必要なんかないの」

ドクターの声も一層熱を帯び始めていた。自らの言葉に興奮を覚えていたようだ。

「ほら、このコ達を見て。薬が投与されたり、身体がいじくりまわされたりしてるでしょう？ ここはただの牢獄じゃない。刑期の短縮を交換条件に、自ら実験動物になるのを志願した人達の特別病棟なのよ。身体が壊れちゃっても”やり直し”がきくのが、アトマの強みよねえ。ま、殺しちゃったらまた捕まえるのが面倒だから、残った刑期が短いコしか殺しちゃいけないんだけど、それはそれ。

平和で誰もが一定の権利を保障されている今のご時世、人間相手の実験データがとれる場所なんて、世界中探してもここくらいのものだわ」

はしゃぐ子供に似たドクターの声を聞きながら、ライムは思い出していた。アリアンロッドが持つ三つの呼称——一、刑務所都市。二、アートの都市。そして三、医療の都市。

「よくできたシステムだと思わない？ アナタ達が犯罪者を捕まえ、市はアナタ達に賞金を出す。ワタクシ達研究者が、犯罪者をモルモットにする。得られたデータから技術が発展し、市はその利潤を得る。莫大なお金の中から、またアナタ達への賞金が出される——」

戦慄がライムの背筋を走っていた。

自分もいつの間にか、循環の中へと取りこまれていると気づかされたからだ。金の循環、経済サイクルの中へと。

目眩がしていた。

アートマは、己の魂を循環させる。だがその循環すらも、もつとより大きな循環——つまり『経済』の、たった一部分でしかないのだ。

「うんざりするね。世間にこれが公表されれば——」

「もう公表されてるわよ。写真付きのウェブサイトすらあるの、知らなかった？ たしかにうるさい輩も一杯いるけれど、結局はお金なのね。既に大きな経済圏が出来上がっている以上、変えることはできないの。だってそうでしょう？ 今はもうなくなっただけけど、人々がもつと酷い搾取を受けている時代だってあった。主になんの罪もない子供なんか、命と尊厳を弄ばれていた時代がね。そんな歴史が何十年、何百年と続いてきた……。それに比べたら、ワタク

シ達のやつてることなんて、たいしたことないんじゃないかしら」

「もし、この人達が廃人にでもなったら？　いくらアトマでも、やり直しはきかないはずだ」

ライムはなおも食い下がった。身体の異常や破壊は、たしかに転生でやり直せるだろう。だが心が、魂が壊れてしまえば、それは言い訳のきかない非人道的行為になるはずだった。

にも関わらず、ドクターの態度は揺るぎない。

「ああいうのはね、実は魂に影響がなかったりするのよ。」もう実験済み”。ストレスやショックで脳細胞がやられても、魂それ自体はまったく傷つかない。肉体とのコネクションがうまくいかなくなるから、狂ったようにみえるだけなの。転生して新たな脳になれば、精神も戻る」

それにね、とドクターはなおも早口でまくしたてた。

「これはただの科学実験じゃない。もつと大きな、アトマの根本に関わる問いへの挑戦でもあるのよ。『ターン目のアトマ』って言葉、アナタも知ってるでしょう？」

もうこの場にはいたくない、今すぐ逃げ出したい――心の内ではそう願いながらも、ライムはその場に踏み止まっていた。

受け止めなければならなかったからだ。

ドクターは一見、狂気にすら駆られているように見えるが、真摯に何かを伝えようとしていた。”マッド・サイエンティストの演技をしてまで”。監視カメラの前では、直接的に言えない何かを。まるで、殺人者の目をくぐり抜けるよう、被害者がダイニング・メッセージを記すように。

「一ターン目のアトマ……。確か、『アトマの一ターン目に形成された人格や価値観は、何度転生しても変わらない』っていう、あれのこと？」

ライムが記憶を絞り出して答えると、ドクターはボルテージをさらに上げた。

「有名な仮説だから、さすがに知ってたようね。その通りよ。でもそれが真実だとすると、困ったことになると思わない？　ここにいるコ達みたいに、一ターン目で反社会的な人格を作り上げちゃったアトマ達は、これからどうすればいいのかしら？　脳の異常によるものとは違う、魂それ自体が望む犯罪行為は、どうすれば再犯を防げるのかしら？　ってね。刑罰が持つ二つの意義は、『犯罪の抑止』と『犯罪者の更生』。この内、犯罪者の更生が永久に期待できないとなったら、ワタクシ達は、社会はどうすればいいのかしらん？　これは、その問いを確かめるための実験なのよ。人道に反するほどの厳罰を与えることで、犯罪者の魂は更正できるのかっていうね」

言つべきことを言い尽くしたのだろうか――ドクターは大きく深呼吸し、声の勢いを弱めた。ライムが初めて見る、優しく穏やかな表情。

「長話、しちゃったわね。こんなに喋ったの久しぶりだから、疲れちゃったわ。ありがと、最後までつきあってくれて」

大仰に礼をした後、ドクターは懷からデータディスクを取り出し、ライムの手へと押しつけた。

「おみやげよ。ワタクシからの愛を形にしたの。大事にして。でも、

けっして開けないように」

「すっごく、いらないんだけど……」

全力で拒絶を表現しようとライムは努力したが、どうやら無駄に
終わりそうだった。

「いいからいいから、恥ずかしがらずにい」

そう言っただけライムの肩をぽんと叩くと、ドクターは無言のまま
ずえりベーター方面へ戻って行ってしまった。呆気にとられるライ
ムへと一度だけ振り返り、寂しげな声で言う。

「今日は楽しかったわ。本当に楽しかった……。また、会いましょ
うね」

それが、最期の声だった。

「——さようなら」

そして翌日。

ニユースを知ったライムは、その日一日、嫌な予感に頭を抱える
こととなった。

ドクターが、自殺したのだ。

遺書も無く、特段の外傷も無く。

死因は、脳内物質の過剰分泌によるものではなくて、

奇天烈なドクターには似合わないほど、オーソドックスで、普通

で、平凡な、
ただの、首吊り自殺だった。

1 - 7 (後書き)

一章終わりです。

「どうしようかなあ……これ」

ドクターのディスクを手にライムは唸り、公園の芝生に腰を下ろした。汗のにじむ晴天下、ディスクであおぐ空気すらも生温かい。

「ろくでもないものだよね、絶対。百パーセントそうだよ」

捨ててしまえとライムの一部が何度もささやいたが、『大事にしてね』と言われた手前、そういうわけにもいかない。

「一度、中身を確かめるのはどうだ？」

そう言ってカグマが大きくあくびをした。木陰で身体を丸め、目を何度もしばたたかせている。

真面目に話へ付き合おうとしている心意気は声から伝わってくるのだが、暑さと眠気だけはどうにもならないようだ。真剣な口調と、だらけた表情のミスマッチがなんとも可笑しい。

「嫌だよ、ウイルスとか入ってそうだし。金庫にでも放りこんでおくかなあ」

一昨日のドクターが、ろくでもない事件か何かの渦中にいたのは、まず間違いないだろう。だからこそ首を吊って逃げたのだ。今思えば、研究室に行く前の体内通信も、それと関連していたに違いない。

今のところ、はっきりとしているのは一点だけだった。

ライム達が、何らかの事件に巻きこまれつつあるということ。そ

れ以外の情報は無きに等しかった。一昨日の会話でドクターが何を伝えようとしたのかも不明、このディスクが何なのかも、何故渡されたのかも不明。これでは、どう対策をとればいいのか判断できるはずもない。

「しばらくアリアンロッドから離れておく……？」

ライムの提案にカグマが首を振った。

「いや、事情が皆目つかめぬ以上、ヘタに動かぬほうがいい。ここは刑務所都市。大陸一、セキュリティが充実している場所だ。仮に何らかの犯罪が絡んでくるならば、アリアンロッド内が最も安全だろう」

「それもそうだね」

「とにかく様子見しかないだろうな。……不確定な物事をうたうだと話してもしょうがない、この話題はいったん終わりしよう。体調の方はどうだ？」

「ドクターから薬はもらってたから、発作は治まってる」

「よし。ならば訓練に入るとしよう。万が一事件に巻きこまれたときのためにも、抵抗力が必要だ」

「了解」

ライムは背筋を正して座禅を組んだ。カグマがうつらうつらしながらも厳かに言う。

「内容は、先程話した通りだ。最初は静かな方がいいだろう。というわけで……」

「うん、寝ててもいいよ」

わかっているよ、と態度で示し、ライムは手を振ってみせる。

「……うむ」

その言葉を最後に、カグマはまたたく間に眠りへ落ちていった。よほどの眠気だったのだろう。今まで威厳を保った声を出していたのが、感心できるくらいの落ちっぷり。

支配率を操作すれば眠気など無視するのは容易いはずだが、カグマはよほどのことがない限りそれをしようとはしなかった。曰く、欲望は肉体からの要求であり、無理に抑え込むのは体調を崩す原因となる、とのこと。

ライムは細目で天を見上げる。陽は強いが、風の穏やかな昼過ぎだった。

巨大な自然公園。広い敷地内には、芝地や樹木などが高度な設計技術に基づいて配置されていた。いわゆる憩いの場というやつだ。

といっても人影は少なかった。遠くの噴水に女性が二人、その近くのベンチにスーツの男が一人、といったところ。皆が本を読んでいるか、軽食を黙々ととっている。カップルや親子連れなどはいなかった。他人とそういった関係を築く人種は、アリアンロッド市民のごく少数しかない。

視線を戻すと、ライムの右手がいつの間にもやらカグマの背中をなでていた。柔らかい毛の感触が伝わってくる。フワフワの、モフモフだった。

日陰にいてもなお眩しいのか、カグマは額を地につけた姿勢で寝ている。まるでお辞儀か土下座でもしているかのよう。息苦しくはないのだろうか、とライムは疑問に思ったが、丸い毛玉は風船のように膨らんだり萎んだりしているので、問題はないのだろう。

「……さて、修行修行っと」

ゆるんでいた口元を引き締め、ライムも両目を瞑った。もちろん眠るためではない。集中力を高めながら、先程カグマに言われた内容を思い出していった。

（お前も、肉体への支配率をかなり上げられるようになった。めざましい進歩だ、私も嬉しい）

——へえ……ほめられるなんて、珍しいこともあるみたいだ。今日はこんなに晴れてるけど、明日は嵐かな。

（舞い上がるな。強くなったからこそ、一つ、注意しておかねばならない）

——もしかして、いまさら精神論でもやるわけ？

（違う。もっと実践的で重要なことだ。今日は、心臓の制御を練習する）

——心臓？

（そうだ。不随意筋という言葉を知っているか？ 通常、意識して動かせる筋肉を随意筋、動かせない筋肉を不随意筋という。たとえば肺や胃を動かす筋肉がそうだし、心筋も不随意筋だ）

——それはわかったけど……だから何？

（これまでのお前では、随意筋と神経の一部を任意に制御するのがせいぜいだった。だがそろそろ、不随意筋も意識的に動かせるほどの支配率になってきている）

——つまり、心臓を意識的に動かして、血流を制御しようってこと？

（違う、逆だ。誤って心臓のコントロール権を得てしまったときのために、訓練を行う）

——？ どうしてコントロールがだめなの。

（もうわかっていていると思っていたが……まだまだのようだな。いいか？ 私達は、自らの肉体を意識的に操作する。しかしそれは、ただ命令を与えて終わりというわけではない。たとえば歩行という動作一つとっても、ただ『歩け』一回命令するだけでは不十分だ。歩行に使われる筋肉の一つ一つへと、その瞬間瞬間に、”絶え間なく命令し続けなければならぬ”。ここまで言えばわかるな）

——なるほど。心臓を動かすときも、鼓動の一つ一つをいちいち命令しなきゃならない……ってこと？

（そうだ。特に心臓は、一定のリズムを保った鼓動が望ましい。鼓動が不定期で乱れた状態は『不整脈』と呼ばれ、身体の不調を招く）

——戦闘中にメトロノームなんか持つてられないしね。

（うむ。だから今日は、いったん心臓を制御してみるとしよう。その後、すみやかに肉体へコントロール権を戻すのだ。『わたしには扱いきれません、やはりあなたにお願いします』と言ってな）

——なんだか癢に触る言い方だけど……わかった。

ライムは心臓へと意識を集中した。

鼓動の音が明確になり、脈打ったびに全身へと血液が押し出されていくのを感じた。心臓から生まれた『波』は、動脈を通して身体

の隅々まで行き渡り、静脈を通じて心臓へと回帰していく。支配率を上げるにつれ、『循環』が強く意識されていった。様々な連想が生まれ、思考が紡ぎ出される。

ドクン、ドクン。

回る回る、血が回る。

まるで魂のように、回る。

血は肉体を回り、魂は世界を廻る。

血は心臓によって勢いを得て、肉体へと旅立つ。

ならば——魂に勢いを与え、死んだアトマをもう一度この世へ押し出すのは、いったい何だろう？

本来なら天へと還っていくべき使い古された魂を、新たな赤子の肉体へ押しつける鼓動は、いったい誰が打ち鳴らしているのだろうか？

何のために、自分達は——。

あふれ出る疑問を押しこめつつ、ライムの魂は、手のひらで心臓を包みこんでいった。ぎゅっと握っては力を抜く、その繰り返し。定期的に、リズムを保って。血液の循環を感じとりながら。

メトロノームはなかったが、カグマの寝息がきこえていた。穏やかで、安定した寝息。その音を頼りにすると、鼓動がともうまく制御できる気がした。実際、うまく制御できていた。心臓をわしづ

かみにして、思うがままに操れていた。

これが、自分の命なのだ――その実感が、強くわいていた。自分の命を、自分がかみ、コントロールしている。安心感があった。”自分は、自分自身をどうとでもできるのだ”という想いが、はつきりと形を得ていった。

だが一方で、それは違うと叫ぶ心もまた存在していた。ドクターの声を思い出した。『ターン目のオートマって言葉、アナタも知ってるでしょう?』

唐突に安らぎがはじけ、不安が膨れあがる。それら全てを吹き飛ばす、外部からの声。

「お姉ちゃん！　こんにちは！」

ドンと背中が突き飛ばされる衝撃。

「!？　ちょ……ぐ、あ、ああ……」

心臓が止まって、死にそうになった。比喻ではなく、文字通りそのままでの意味で。

胸をおさえて鼓動と呼吸を整えようとするライムの耳に、パニック気味の幼い声が届いていた。

「ど、どうしたの!?　お姉ちゃん?　だいじょうぶ?」

誰のせいだ、誰の。

なんとか調子を整えて恨めしげに見上げた視界に映るのは、目をうるませてこちらをみつめる、幼い女の子の顔。

強い日光の輝きを背に受けて立つ、シエスの小さな身体だった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

何があつたのか、自分が何をしてしまったのかもわからず泣きじやくるシェスを慰めるように、カグマはその身体をすり寄せた。

「気にするな、君は何も悪くない。こいつが修行不足なだけだ」

尻尾で指されたライムは不機嫌さを隠さず言い返す。

「言ってくれるね。こっちは本当に死にかけたんだけど」

「それはお前自身の未熟さによるものだろう。声をかけられたくらいで制御を失つてどうする？ 実戦には常に不確定要素、つまり驚きに満ちているものだ。むしろ今回の件は、よい経験になったといえるな」

シェスびいきの態度を崩さないカグマを、ライムは半眼でにらんだ。

「このロリコン猫め」

「幼子へと優しく接するのは、人道的に当然だ」

カグマは胸と尻尾をぴんと張ってみせた。本心からの言葉なのだろう。

「猫がそれを言うか……。もういいや。で、あなたは何しにきたわ

け？」

気持ちを切り替えて話題をシェスへと振る。なるべく怖がらせるように、威圧的な声で。

「え、あ、あのね……」

脅しがきいたのか、それとも躊躇っているのか、シェスはもじもじしていた。カグマに前足で優しく触れられ、言葉を促されると、掠れて消えるくらいの小声で話し始める。

「あそんでほしかったの。ひとりぼっち、つまないんだもん」

シェスはただどしく言葉を紡いだ。ジーンは仕事が夜のため、この時間は寝ていること。この都市に連れてこられて日が浅いので、知り合いはいないこと。ふらりと出かけたこの公園で、ライム達を見かけたこと。それでつい、はしゃいでしまったこと。

「あー……。そう。ふうん……」

一通り聞き終えた後でも、ライムの突き放した態度は変わらなかった。

「悪いけど今は忙しいんだ。そうは見えないかもしれないけどね。だいたいさ、この前言わなかったっけ？ わたし、子供は嫌いだった」

酒場で初めて会ったときと、同じようににらみつけてやる。

そもそも、前回あれだけ脅しつけたのに、なおも絡んでくるのが驚きだった。人の印象は初対面で八割決まると言われているが、幼

い子供にはあてはまらないのかもしれない。

「そ、そうなんだ……」

ことさら厳しく言われ、シエスはみるからに落ちこんでいた。ライムとカグマの間で一瞬のアイコンタクトがなされ、互いに小さくうなずきあう。

ドクターの件がある現在、他人との関わりは極力さけるべきだった。もし、何らかの事件にシエスが巻きこまれてもしたら面倒だ。カグマはあくまでも紳士然とした態度でシエスへと謝罪した。

「すまないな。私達にも事情があるのだ。悪いが君の要望には応えられない」

そうだ、それでいい。カグマへと意図が伝わったことにライムは満足した。ただし、その後に放たれた言葉の続きをきくまでだったが。

「だが、幼子を外に一人放っておくのも心配だ。家まで送っていいう。ほら、何をしている？ ライム、お前も来い」

「……はあ？」

いったいどうしてこんなことになっているのか。

頭上できやつきやとはしゃぐシエスがふらふら動くのを注意して肩車しながら、ライムは渋面を固定していた。自然公園からの酒場まで歩いて二十分はかかる。結構な距離だ。

「なんでわたしが、こんなことを……」

口から出た疑問にも答えは出ている。全ては、二メートル先を歩く馬鹿猫のせいだった。

「よい天気だ。子供が建物の中にいるのはもつたいない」

「あっち、みてみて！ ひこーせんだよ！」

「うむ、よく知っているな。たしかにあれは飛行船だ」

「どうでもいいけど、あんまりじたばたしないでくれないかな……。落っこちてもいいなら、それでもかまわないけど」

シエスの指す方角の空に飛んでいる、巨大な飛行船。吊り下げられた電光板には、立体文字でこんなテロップが流れていた。

『創立祭まであと三日！ 今にも死にそうな人、これから死のうと思っている人。この祭典まで、どうせなら生きてみませんか？ 当日のゲストは、なんと！ 大陸が誇るトップ・アイドルの——』

そこまで文字を追ったところで、ライムは馬鹿馬鹿しさに脱力して頭を落とした。

「なにあれ……」

「だから飛行船だと言っただろう。シエスでさえも知っているというのに、お前は今まで何年生きてきたんだ？」

「いや、創立祭りのことなんだけど……もういいや。なんとも言えよ、なんともさあ」

言い返す気力すらないライムを尻目に、シエスは人差し指を唇に

あてて疑問符をうかべた。

「ね、そーりつさいってなーに？」

「アリアンロッドの創立を祝う、一年に一度の祭りだな。この都市の誕生日のようなものだ」

「おおー！ たんびようび！」

シエスが身体を揺らすたびに首が締められるものの、ライムはもはや何も言わない。もうどうとでもするがいい、好きにしろ、といった気分だった。

「シエスもね、前のたんじょうびは、おとうさんとおかあさんがいっしょだったんだよ」

「ほう。それはよいな。今年もご両親と——ぎにやつ」

カグマは言葉の途中で悲鳴をあげた。ライムの足に、尻尾を思い切り踏みつけられていたからだ。

「貴様、何を……」

噴き上がりかけたカグマの怒りも、シエスの様子に気づいた途端、みるみる萎んでいった。

「もういないの。おとうさんも、おかあさんも、もういないの」

シエスの声は震えていたが、笑顔を保ったままだった。強い子供だ、とライムは思う。ジーンは言っていた——色々あって、息子夫

婦のところから引き取ったのだ、と。

「……すまない。軽率だった」

「だいじょうぶだよ。おじいちゃんがいてくれるもん。おねえちゃんともネコさんも、いてくれるもん」

「わたしは別に……痛っ」

今度はライムが足を踏まれる番だった。わずかな体重をライムの足の甲一点へと集中しながら、カグマが不器用なりに話題を変えようと試みた。

「ところで知っているか？ 創立祭では、>クイーン<が市民の前に姿を見せる催しがあるそうだ。彼女が表に出てくるのは、一年に一度なのだそうだぞ」

「クイーン？」

子供受けがよさそうな単語に、シェスは興味を惹かれたようだった。場の雰囲気是和らぎ、カグマの声にも安堵がにじむ。

「アリアンロッドの創立者で、現在の都市運営における最高指導者だな。要するに、女王様というやつだ」

「すごい！ きれいな人なのかな？」

「生憎と私は見たことがないが……ライム、お前はどうか？」

「あるわけないじゃない。カグマに連れてこられるまで、この都市

の名前すら知らなかったのに」

そうしてたわいもない話をしながら酒場へと送り届けるうちに、シエスは積極的にライムへと話しかけるようになってしまっていた。幼い女の子の笑顔は、ライムにとって不本意であり、けれど心とませるものでもあり——そして、恐怖をわき起こさせるものでもあった。

昼寝の続きをしたがるカグマと一旦別れた後、ライムは銀行で用事を済ませた。

その帰り道でとある思いつきが頭へとうかび、市の図書館へと足を運ぶ。

（精神紋、歴史、と……）

検索ワードを内心で呟きながら、端末に向かってキーボードを叩いた。

図書館といっても、紙で作られた本は一冊も無い。専用データベースへと接続できる端末が、ずらりと並べられた建物というだけだ。あらゆるテキストが電子ファイル化された時代となつて久しい。本来なら外部端末からでもウェブを通じて閲覧可能であるべきなのだが、権利だなんだの関係で、図書館内からでないとアクセスできない情報も多いのだった。まったく、くだらないというしかない。

検索結果からのリンクを辿って情報を集めながら、ライムは思索を深めていった。

一昨日、ドクターはこう言っていた。『魂は観測できない』と。だが、実際に観測できている例を、自分達は知っているではないか。

”精神紋認証”。

これが文字通り、精神や魂に刻まれている紋様か何かを認識できる技術であるならば——つまり、魂を観測できる技術であるならば。

ライムの身体の異常をどうにかするヒントだってつかめるかもしれない。

さすがに図書館専用データベースだけあって、アリアンロッドやアートマ関連の情報は充実していた。そうして判明したのは、次の事実だ。

まず、精神紋認証は、アリアンロッド創立より前に生まれていた技術だった。というより、この技術を前提として、アリアンロッドのシステムが構想されたのだという。それはそうだろう。何度も転生によって肉体を替えるアートマ、その個人認証を行うには、精神紋に頼るしかない。そして、”個々人を識別・認証できなければ、社会は成り立たない”。あらゆる個人の権利・義務を管理するためには、『誰が誰なのか』をはっきりさせる必要があるからだ。

次に、精神紋認証の技術を発明したのは、>キング<——アリアンロッド創立者の一人である、天才科学者だった。アリアンロッドの基礎は三人の>フェイス<、すなわち>キング<、>クイーン<、そして>ジャック<の三人によってつくられたのだという。だが、アリアンロッド一市民であるはずのライムすら、キングとジャックの名など聞いたこともなかった。

検索を続けた結果、その理由はすぐに見つかった。

二十二年前、キングが死亡し、ジャックが投獄された事件。それ以後は二人共、アリアンロッドの歴史から姿を消している。

（何が起こったんだろう……？）

ライムがいくら検索しても、事件についての詳しい記録はみつからなかった。

わかったのは、キングの死にジャックが関わっており、その罪を

問われて冷凍刑に処せられたということだけだった。冷凍刑——死刑が機能しないアリアンロッドにおける、最も重い刑罰。”アーマ犯罪者を唯一、半永久的に社会から追放し続けるための刑”。

それにしても、奇妙だ。

ジャックとの間に何があったのかはともかくとして、何故、キングは未だにアリアンロッドへと戻ってこないのか？

アーマであるならば、死後二十二年も経過した今、転生して復帰していてもいいはず。たった三人でこの都市の基礎をつくりあげた人物だ、その情熱は相当のものだろう。たとえどんな理由で死んだにせよ、転生した後に都市をほったらかしというのはおかしい話だ。何か理由があるに違いなかった。

「……くそっ」

ライムは歯噛みしていた。キングに会えれば、自分の身体について何かわかるかもしれないなかつたというのに。

最近についてない——そう思つて窓の外を見ると、時刻はすっかり夜になっていた。夢中になって作業していたせいか、時間の流れが速い。せき止められていた疲れもどつと押し寄せてきていたので、今日は戻つて寝ようと考えた。

図書館出口にある階段を、のんびりと降りている途中のこと。

前方に立つ人の気配にライムは足を止め、顔を上げた。

階段の先に立つてライムを見上げるのは、小柄で華奢な人影。

青い瞳を濡らした女性だった。月明かりすら無い暗い路地にいても、その金髪は上品な輝きをたたえている。チンケな街灯の光すら、女性を照らすただけだけに作られたスポットライトにみえるほどに。

「あなた……たしか、ステーションにいた」

「ごめんなさい……」

掠れて消えてしまいそうな、幻影にもノイズにも似た、女性の謝罪。

「何？ 何を言ってるの？ あなたは……誰なの」

走り寄って女性の身体をつかみたかったが、ライムの足は命令に従わず、その場に立ち尽くしていた。夢の中にいるのかとも思った。五感のはつきりと機能しているのに、身体だけはどうしてもいうことをきこうとしない、あの感覚。

「私は……謝らなければならないのです」

「だから、何の話だと——」

「すべては私のわがままだったのです。そのせいで……本当に……ごめんなさい」

下げていた頭をゆっくりと上げ、女性は闇の中へ消えていった。金髪の輝き、その残像を、帯状に光として漂わせながら。

「……なんなんだよ、いったい」

呪縛が解けたように、ライムの身体が感覚を取り戻し始めた。自分の呼吸が荒いのを認識する。手のひらに汗がにじんでいた。意味がわからなかった。現実から切り取られ、少しの間だけおとぎ話の

世界へと放りこまれて、今しがた帰還したばかり——そんな感じ。異常な疲労感があつた。早く帰って、すぐにでもベッドに倒れこみたい。そう考えながら、人気のない路地を五分ほど歩いたところだった。

「ライム」アシュフィールドさんですね？」

前方に黒服の男が現れ、ライムの歩みを止めさせた。

「人違いだよ」

ライムはリラックスした姿勢を維持しながら意識をとがらせた。いつの間にか後ろにも黒服が立っている。前後を挟まれていた。自分の迂闊さを罵らずにはいられない。

間抜けめ、疲れていたからって油断しすぎだ。

「だからとつとと、そこを通してくれない？ 疲れてるんだ、死にそうなくらい。本当に、誰かを殺したくなるくらい、疲れてるんだよ」

ホルスターへと向かいかけたライムの手は、黒服の声によって制止された。

「シェス」ロスコットさんの身柄は、こちらでお預かりさせていただいております。ですからあなたにも、協力的なご同行をお願いしたいのですが」

慇懃な言葉と共に投げてよこされたそれを見て、ライムは激昂を押さえこむためにかなりのエネルギーを消費した。

「移動は車かな？ 歩くのは嫌なんだ……。少し寝たいしね。体力をためなくちゃいけない。——」お前らに、目にも物を見せるためのさ」

子供の小指が、コロコロと路地を転がる。

その小さな爪が反射する光を前に、ライムは黙って両手を挙げるしかなかった。

黒服達の行動は迅速で完璧だった。

ライムを素早く拘束し、視覚や聴覚も封鎖する。体内通信もジャミングされ、外部への連絡手段は皆無。移動に使われた車も重力素子式で、振動は無い。だから今どれだけ走ったのか、どういった地形を走ったのかという情報を、体感覚から推測することすらライムにはできなかった。

目隠しのまま車から降ろされ、ライムはひきずるように歩かされた。

ブーツの下にあるのは土の地面。湿った風が緑の香りを運んできていた。合成された人工プラントには出せない、天然植物の泥臭い匂い。

おそらくはアリアンロードの郊外、あるいは上層のエイル大河沿いに広がる、森林地帯のどこかだろう。近くに助けを呼べる施設などがあるかどうかは、残念ながらわからない。

扉が開かれた音の後、シエスの涙声が聞こえてきた。

「おねえちゃん……！」

ライムの目隠しが外されたのは廃屋の中だった。小屋というより大きな物置に近い。窓には板が打ち付けられ、光源は簡素な携帯ランプしかなかった。

ランプの横に、左手を押さえながらぶるぶると震えるシエスが座りこんでいる。両足を縛られ、首にも縄が巻かれていた。まるで、リードをつけられて嫌々散歩へと向かわされる子犬のよう。

その縄の端を握り、シエスの後ろに立つ人影がいた。

「今宵は新月……月が見えなくて残念です。嗚呼、本当に残念でならない。ボク達が出会った最初の夜だ。なるべく、ロマンティックにいきたかったのですがね」

中性的な声の痩身だった。口元を除いた顔全体が仮面に隠されている。なでつけるように流れる黒の長髪は、美しいというよりも妖艶な、いや、卑猥な印象をライムへと与えた。似た髪型のドクターとは正反対のイメージ。ようするに、最低最悪な第一印象だった。今すぐぶっ飛ばしてやりたくなるほどの。

「用件は？」

ライムは単刀直入に訊いた。シエスには一声もかけない。言うべきことは色々あったが、今はまず、現状を打開するのに意識を振り分けるべきだった。戦闘と同じ、選択と集中だ。余計なものを見て振り回されてはならない。

「いやだなあ、もっとお話ししようよ？ ボク、ずっと楽しみにしてたんですから。フラウ・ゲフェスの監視映像に映る貴方を、一目見たときから、ずっとね。何かご要望はありませんか？ お茶の一杯でも用意させましょうか。チョコレート・ケーキもつけたりなんかすると、とてもよろしいですかね？ —— どうでしょう？」

暗にドクターとの関連を示しながら、仮面野郎は舐めるような口調で言った。ナメている、馬鹿にしている、という意味ではない。言葉の一句一句が述べられるたび、ライムの中にぞっとする感覚が生じるのだ。肌を舌が這いまわっている幻覚が走るほどの、おぞましい響きだった。

——あの優男、次会ったときは、おぼえてろよ。

事件へと巻きこんでくれたドクターへの復讐を心に誓いながら、ライムは仮面野郎を嘲笑ってみせた。

「人とともに話したこともないの？　こういうときはさ、まず名前を名乗って、そのツラも見せなよ」

「おお、ボクの顔に興味が？」

「興味はないさ。どうせすぐ、ぐちゃぐちゃになるんだからね。ただ、顔面を踏みつけるのに、その仮面は邪魔だろうから」

ライムの挑発に、仮面野郎は予想外の反応をかえした。いきなり自らの身体を強く抱きしめたかと思うと、その場でくねくねと悶えだしたのだ。

「素晴らしい……！　なんて素晴らしいんだ。まさか初対面で、そこまでしていただけるだなんて。恐悦至極、感謝の極み——」

その後も意味不明な言葉をひとしきり発し、一人で興奮した後、仮面野郎はとても残念そうに額へと指を添えた。

「ですが、またの機会にしましょう。今宵のボクは、この仮面を外せないのです。外したら、”ボクがボクになってしまふ”のですね。それはとても困るのです。名前も名乗れません。そもそも、ボクに名前はないのですけれども……そうですね、今宵は、ワンダラーとでも名乗っておきましょうか」

そう言って、ワンダラーは大仰なお辞儀をした。

「呼び名がないのは不便ですからね。だってそうでしょう？ 貴方にはこれから、ボクのことを沢山沢山呼んでもらうんですから。」
お願いワンダラー、助けてワンダラー、もう止めてワンダラー……
”ってね”

次の瞬間、ワンダラーの右手がひるがえった。

いつの間にか握られていた長剣から、赤い血が滴っている。

ライムの左肩がざつくりと斬られ、勢いよく血が噴き出た。シエスが悲鳴をあげて壁際へ下がろうとするが、首縄を引っ張られて頭を床に叩きつけられてしまう。

だが斬られたライム本人は動じていなかった。後ろ手を拘束され傷から出血しながら、それでも背筋を伸ばして立ち続けている。その様子をみたワンダラーが、刃の血を舐め取って口角を吊り上げた。

「いけませんねえ、痛覚を遮断するのはいけません。ボク、全部わかってるんですよ？ 『血液』と『痛み』さえあれば、再生者である貴方の傷はすぐに治る。なのにどうして、貴方の身体まだ血を噴いたままなんです？ さあ、早く痛覚を戻して、傷を治して。ご安心ください、また斬ってあげますから。ボクの剣で、今宵はとことん感じちゃってください」

「……一つ条件がある」

痛覚を戻し、苦痛と熱に耐えながらも、ライムは無表情を維持した。

「その子を黙らせる。いちいち泣き叫ばれるとうんざりする」

ライムが顎で指し示した先では、倒れたままのシエスが身体を丸めて奥歯を鳴らしていた。その股間を中心に水溜まりが広がっている。

強い罪悪感が、肩の傷など比較にならない熱でライムの精神を灼いた。

一方、ワンダラーは心から楽しそうにシエスを見下ろしている。

「それは、殺してもいいというお話でしょうか？」

返答は、回し蹴りだった。

傍らにいた黒服の腹へとライムのブーツがめりこむ。吹き飛んだ黒服は壁へと激突し、脆い廃屋全体をギシギシと揺らした。

「自分で言うのもあれだけど、あまり我慢強くないんだ。ユーモアのセンスもない。ジョークは通じないから、気をつけてほしい」

蹴り足をゆっくりと戻すライムを見ながら、ワンダラーは狂ったように両手を叩いた。

「いいでしょう。ええ、いいでしょうとも！ 愛する貴方の頼みです、これをどうして拒否などできませんようか」

長剣の鞘が弧を描き、シエスの首をしたたかに撃った。気絶したのか、か弱い幼女の身体はぴくりとも動かなくなる。

ワンダラーはもはやシエスに目もくれず、ライムへと近づいてその顎をなぞるようになでた。

「さあ、これでもう我慢は要りません。我慢強くないのでしょうか？ 思う存分叫べます、泣き顔も披露できるじゃないですか！ 今

宵は長い、時間はたっぷりあります。ボクにきかせてください。貴方の喘ぎを。嫌でも感じてしまう、肢体の震えを」

「……くそつたれめ」

ライムは唾を吐きかける。仮面についたそれを、ワンダラーは長い長い舌で、じつくりと味わうように舐め取ったのだった。

絶叫が廃屋に響き渡っていた。

もしシエスに意識があつたなら、きいただけで気絶するか、心が壊れてしまったかもしれない。それほどに壮絶な叫びだった。

「ドクターから受け取った、ディスクはどこに？」

「銀行の、貸し金、庫に、入れた」

拷問はワンダラーの宣言通り、とても長く続いた。

「中のデータは見ましたか？」

「見て、な、い。あつ……ああああああ！」

ワンダラーはライムの身体のおちこちへと、長剣を突き刺していた。

そう、本当に色々なところへと――突き刺し、突き入れ、突き破った。

「ディスクにプロテクトはありましたか？」

「知らなあ、い、……あ、あ、知るわけ、ない！ ディスクには、何も触れてない！」

刺し方も様々だった。素早く何度も突いたり抜いたりを繰り返す時もあれば、刺し入れた後の刃を捻って、ライムの肉体をドリルのように削ぎ落とし続ける時もあった。

このときばかりは、再生能力が完璧に裏目となっていた。刃が肉体へと侵入するたび、再生しようとする細胞がすぐにまた斬られ、”新鮮な痛み”を絶え間なく生み続けた。

「ディスクにプロテクトがかかっているとしたら、その解除方法に心当たりは？」

「知、らない……」

ワンダラーの質問は次第に、ライムにとって全く憶えのない内容へと移っていった。

答えられないのがそもそも当たり前だった。ライムがドクターと話するのは、いつもフラウ・ゲフェス内ではなかったのだ。会話内容は記録に残っているはずだから、ワンダラーがそれをきいていないはずがない。つまり、ワンダラーが既に知っている事柄しか、ライムはドクターから知らされていないのだ。

にも関わらず拷問を続けるのは、念のための確認、そして単なる娯楽なのだろう。ゲス野郎め。

「では――>ニルヴァーナについて、何か心当たりは？」

「何だよ、それ……。きいたことも、ない」

不幸にも、あるいは幸運にも、ライムの意識は朦朧としてきていた。傷も治らなくなっている。肉体から血が失われすぎたせいで、痛覚の有無に関係なく、自己再生能力が機能しなくなっているのだった。

髪をつかまれ、何度水をかけても、ライムの瞳は焦点を取り戻さずとしなかった。その様子を見たワンダラーが、大仰に頭を抱えて名残惜しさを表現する。

「嗚呼、残念ながら時間のようですね。幸せの魔法が解ける……馬車はカボチャに、白馬はネズミに。輝くドレスは破れ、娘はみずばらしく倒れる。ガラスの靴は、どこにもみあたらない」

ワンダラーの声が、そして痛みが、夜の向こうへと遠ざかっていった。服と肉体をぼろぼろにしたまま、倒れ伏したライムは瞳を閉じ、気を失った。

――。
真っ白な世界。

（ライム……ああ、ライム……）

誰かが、泣いていた。

自分の名を呼びながら、泣いていた。

（どうしてあなたが……そんな、神様）

白いスクリーンが、泣きわめく女性の像を映し出す。そこでライムは思い出した。

この人は、自分の母親だ。

自分の、一ターン目の母親だ。

――泣かないで、母さん。

一ターン目、二十歳になるまで後二ヶ月――原因不明の病に冒され、死ぬ間際となった自分が、こう言ったのを憶えている。本心からの言葉だった。母には泣いてほしくなかった。自分などのために、父も母も、ライムのために大陸中を駆けずり回り、色々な医者

探してくれた。名医と呼ばれる人々すべてが首を横に振ったが、両親は諦めなかった。最期の最期まで。そのために、どれだけ生活が苦しくなるうとも。

世界は、愛に、『想い』に満ちている。

両親だけではなかった。多くの人がライムを想ってくれた。それは愛であつたり、親切であつたり、友情であつたり、ちょっとした気遣いだつたりした。個々人に差はあれ、みんなが他人のことを想っていた。

だからこそ、怖かった。

”誰かに想われることは、ただそれだけで、その誰かの人生を破壊しうる”。

想いが深ければ深いほど、強ければ強いほど。徹底的に、容赦もなく、心も身体も、何もかもを、粉々の台無しにしうる。

一ターンの目の死に際に、両親の顔を見て——ライムが学び、魂に刻みつけた真理は、まさにそれだった。

もし、この人達の子供がわたしじゃなかったら。

もし、この人達がわたしを愛していなかったら。

この人達は別の、もっと幸せな人生を送っていただろう。娘の死を、嘆き悲しむこともなかっただろう。

（しなないで——）

呼びかけがきこえていた。泣きながら、自分へとすがりついている声。

（しなないで！ いやだよ、こんなの）

——だまれ……！

ライムの魂が頭を抱え、苦しみに首を振った。やめてほしかった。自分のために、自分なんかのために、無駄な涙を流すのは。

世界の白が転じ、黒へと変色していく。それは現実の色だ。現実に満ちる色は、いつだって、圧倒的なまでに、白でなく黒。

意識が否応にも覚醒し、おそろおそろ、両目を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2361y/>

ーターン目のアートマ

2011年11月26日17時51分発行